＊公開当時Flashを使用していたサイトのため、画面をスクリーンショットで撮影しPDFで掲載しています。

Users:kitagawa:Documents:きたがわ:04 TOC-HP:ag:exh51:whynot-3.swf

アートがあれば
WHY NOT LIVE FOR ART?

2004/05/26 水 → 07/11 日 東京オペラシティアートギャラリー

26 May(Wednesday) → 11 July(Sunday)2004 Tokyo Opera City Art Gallery

F.T.colLection 01

S.S.+K.M. collection 02

O.S. collection 03

O.N. collection 04

T.R. collection 05

M.H. collection 06

Ugeyan collection 07

382 collection 08

S.H. collection 09

TOC collection 10

ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY

| Home | Introduction | artists | Information |

Introduction

美術作品の「コレクション」といえば、多くの人は美術館に陳列されている作品や、企業や個人の名を冠した国内外の有名コレクションをイメージされることでしょう。しかしながら、ニュースで耳にするような億単位の美術作品とは異なり、現代美術作品のなかには、一個人が日常生活を送るなかでめぐり合い、購入し、人生を共にするものもあります。
個人が作品を日常の営みのなかで収集する土壌がようやく形成され始めてきた現在、雑誌や展覧会でも個人が収集した「プライベート・コレクション」が注目されるようになってきました。インテリアの観点から、アートがある暮らしの提案として、あるいは個人の視点から見たアートシーンとして、新たな時代のコレクションのあり方とコレクター像が生まれつつあるのではないでしょうか。

こうした状況のなか、当館では9つのプライベート・コレクションと当館のコレクションをとおして、アートが私たちの生活や価値観とどのように結びつき得るのかを紹介します。
日常の営みのなかで接するアート作品とは、一体どのようなものでしょうか？
また、人はなぜ、何を求めて作品を集めるのでしょうか？そして、作品には一体どのような引力があるのでしょうか？

本展では、収集のきっかけや、運命の作品との出会い、交流を築くに至ったアーティストにまつわるコレクターの様々な思いを、作品と一緒にご覧いただきます。そして、アートの魅力や他者の異なる価値感に触れながら、「アート＆ライフ」に向けられた新たな視点を発見する機会となることでしょう。

F.T. collection photo:kioku keizo

artists are:

【出品予定アーティスト】

[3F Gallery 1&2（9 private collections）]

青木陵子
赤木仁
赤塚祐二
アシュ - ム・ヴィヴィッド・アストロ・フォーカス
有田泰而
マヌエル・アルバレス・ブラーボ
マンマ・アンダーソン
イ・ブル
石本泰博
伊藤存
ジョエル・ピーター・ウィトキン
エドワード・ウェストン
上田義彦
オラファー・エリアソン
大木裕之
岡田裕子
小谷元彦
クリス・オフィリ
加藤泉
金子國義
喜多川相説
マージ・ギルリンクス
草間彌生
操上和美
ジョセフ・グリグリー
桑原正彦
小金沢健人
小林孝亘
小林正人
ドミニク・ゴンザレス＝フォルステル
ジグリット・サンドストロム
ローマン・ジグネール
篠田太郎
島袋道浩
ジュリアン・シュナーベル
杉戸洋
須田悦弘
千利休
ジェフ・ソート
デイヴィッド・ソープ
竹川宣彰
ジーン・ダニング
太郎千恵蔵
ヴォルフガング・ティルマンス
ポール・デイヴィス
できやよい
トム・フリードマン
奈良美智
野田幸江
長谷川純
原口典之
ピーター・ビアード
廣瀬智央
福井篤
藤澤江里子
G. H. ブラッサイ
D. ブリット
キャンディス・ブレイツ
ハンス・ベルメール
アーヴィング・ペン
ヨーゼフ・ボイス
ディミトリ・ホルタ
ジョナサン・ボロフスキー
バリー・マギー
松本三和
丸山直文
村岡三郎
村上隆
村林基
ロバート・メイプルソープ
もとみやかをる
ポール・モリソン
森村泰昌
柳生雄弐
ヤノベケンジ
ジュン・ヤン
ヤン・フドン
マーク・ライデン+ティム・ビスカップ
+ゲイリー・ベイスマン
リチャード・ライト
ハーブ・リッツ
ジョルジュ・ルパープ
アレクサンドル・ロトチェンコ
and more!

[4F Gallery 3&4
(Tokyo Opera City collection）]

郭仁植	松谷武判
加納光於	村上友晴
白髪一雄	山口長男
鈴木治	山田正亮
崔恩景	尹亨根
鄭相和	吉永裕
難波田龍起	李禹煥

Information

期間：2004.5.26［水］— 7.11［日］
会場：東京オペラシティアートギャラリー
開館時間：12:00 — 20:00（金・土は21:00まで、最終入場は閉館30分前まで）
休館日：月曜日

入場料：一般￥800（￥600）、大学・高校生 ￥600（￥450）、中学・小学生 ￥400（￥300）
（かっこ内は15名以上の団体割引料金／その他、閉館 1 時間前より入場料金半額、65歳以上半額。週末の中・小生無料。）

同時開催：project N17「東亭 順」

主催：（財）東京オペラシティ文化財団
協賛：NTT都市開発株式会社／第一生命保険相互会社
協力：オオタファインアーツ／富士ゼロックス株式会社　ART BY XEROX

お問い合わせ：東京オペラシティアートギャラリー　03-5353-0756

courtesy: Shiraishi Contemporary Art

F.T.colLection 01

限りなく私的な…

S.S.+K.M. collection 02

O.S. collection 03

O.N. collection 04

T.R. collection 05

M.H. collection 06

Ugeyan collection 07

382 collection 08

S.H. collection 09

TOC collection 10

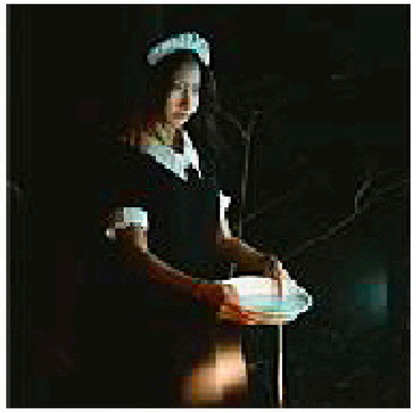
ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY

| Home | Introduction | artists | Information |

01 F.T.collection

gallery view ▶

イ・ブル《 Linger (red beads) 》
2001
courtesy 白石コンテンポラリーアート



小谷元彦《 夜尿症 》
2001
courtesy 山本ギャラリー

草間彌生《 野に立ちて 》1983
courtesy オオタファイアーツ

目で見たものがそのままじわじわと皮膚に浸透していくような、身体性に訴えかける作品が好んで収集されているコレクション。日々目にすることで、自己演出や発見へのパワーをくれたり、自分らしく生きる刺激になるような作品と一緒に暮らしている。
日本をはじめ、アジアの作家を応援したいという意識もあり、コレクションには、可憐な少女性と子悪魔的な物語が同居した世界を表現する青木陵子（1971– ）の作品、繊細で精緻な美しさと奇妙な身体性を感じさせるイ・ブル（1964– / 韓国）のオブジェ、変異した身体を表現し続ける小谷元彦（1972– ）の写真、ドットや突起物の反復イメージで有名な草間彌生（1921– ）の箱型作品、科学・技術・哲学にファンタジックなアイデアを合わせ持つ篠田太郎（1964– ）の写真などが主流となっている。

01 F.T.collection

collection▸

F.T.collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

限りなく私的な…

日本の現代アートシーンに足を踏み入れるきっかけとなったのが、草間彌生の立体作品《野に立ちて》を購入したことです。彼女には前から関心がありました。作品を実際に手に入れたこともそうですが、取り扱いギャラリーのオーナーとの出会いも大きな機縁でした。幼い頃に行った美術館、父の書斎で飽きずに見た美術の本、それから後になって美術史を勉強するために大学に戻ったこと、美術への関心はずっと持ち続けてきたように思いますが、見ることの喜びの原体験は絵本だと思いますね。盗賊が洞穴の中で宝の山を発見する場面とか、お姫さまのティアラとか、冒険好きの女の子が動物を引き連れて月旅行に出る物語があったのですが、その中のクレーターの名前が書かれたトレーシングペーパーがかぶさった月の絵とか。鮮明に憶えているイメージはたくさんあります。特に気に入った絵は本から切り抜いてリカちゃんの洋服タンスにしまいこんでました。両親に見つかった時は怒られましたよ。あれを処分しないで今でも持っていたら楽しかったでしょうね。

ギャラリストの存在はとても大事ですよ。作品の購入というのは最終的には自分の眼で良く見て自分が本当に好きになったものを選ぶのが理想ですよね。だからこそ面白い。でも

01 F.T.collection

collection▸

F.T.collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

ギャラリストの存在はとても大事ですよ。作品の購入というのは最終的には自分の眼で良く見て自分が本当に好きになったものを選ぶのが理想ですよね。だからこそ面白い。でも現代アートはナマモノですから鮮度が重要になってきます。常に新しい情報が欲しいわけです。それに気になるアーティストの「今」「過去」そして「これから」のストーリー、作品のコンセプト、いったい誰がどこでどんな活動をしているのか、次に発信されるものは何なのか、知りたいことは沢山あるでしょう？　自己リサーチをするとしても、彼らとの対話は欠かせません。

現在のスタイルで作品を購入し始める以前は、実用性のある現代工芸から始めて、それから既に評価の固まっているアーティストのマルティプル*を買ったりしていました。ジョーンズ、ホックニー、ステラ、ラウシェンバーグなど。購入の目的は「壁を飾りたいから」でした。今ももちろん買った作品は日々目にできるようにきちんと生活空間に展示することが基本ですが、私にとってはどれも展示物以上の存在です。私の個人的な世界を一緒に形成して、そこに一緒に住んでくれるもの。あるいはかなりナルシスト的アプローチですが、時に私を語り演出してくれる存在。既に私の一部と化しているかけがえのない作品もあります。

01 F.T.collection

collection▸

F.T.collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

もあります。

作品を「欲しい」と思う沸点はかなり曖昧に存在しています。買うまでに何度か見て考えることもあれば、すぐに決めてしまうこともありますし。迷うのも楽しいですよ。好きなものを前にして迷うわけですから。

皮膚感覚に訴えてくるものに惹かれます。ひんやりと冷たいもの、官能的にゆるりと温かいもの、尖った感じ、あるいは柔らかそうなもの、指や手で潰せそうなもの。他のコレクターの方たちと自分のコレクションを比較したり、まして競って買うようなことはまったくありません。他の人が持っている作品を見るのは大好きですけれど。

収集はマイペースで、自分の家を建てていくような感じ。ゆっくりです。美術館ではありませんから、とりわけ系統立った計画的な購入を心がけていることもないですし、欠けているものを補完しようと頑張ったりもしません。心から好きなもの、そして私らしいものを持ちたい。素直な気持ちで。現代アートに向き合うというのは、今自分が生きる時間に向き合うということでもあると思います。

マルティプルを買っていた時は、それらのアーティストが活躍していた1950年代から70年代のニューヨークのアートシーンを読んで知ることが楽しかった。彼らの歴史的なクリ

01 F.T.collection

collection▸

F.T.collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

マルティプルを買っていた時は、それらのアーティストが活躍していた1950年代から70年代のニューヨークのアートシーンを読んで知ることが楽しかった。彼らの歴史的なクリエイションの小さな一片が自宅の壁に飾られているのだなと。それが、自身が実際に生きる時間や場所や社会状況に同時進行で関わるアーティストの活動を目撃する、というレベルに移動してきたわけでしょう？アーティストだけでなく、アートの現場に関わる様々な人々も同様です。それぞれに感じるシンパシーの度合いはもちろん異なりますが、極めて人間臭いリアルな世界を見るわけです。尽きない魅力に満ちています。アーティストの内面に触れて、それで作品がよくわかってきたり、見方が変わったりと言うケースも少なくありません。

アートと共に暮らし始めて変わったことは、良い意味でひとつだけ。私を縛ってきた規定の価値観のようなものから解放されたこと。固定観念の殻から脱皮して自由になりましたね。眼鏡をはずして裸眼で見る気持ちよさ、何でも来いと思える強さ、ちょっと曲がっていても好きなだけ立てるアンテナ。
日本のアートシーンに対して言いたいことは、お行儀が良いのも大事なのですが、わがままを通すことの愉快さも忘れてほしくない。アートを愛するのって究極のわがままゲーム

01 F.T.collection

collection▸

F.T.collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

アートと共に暮らし始めて変わったことは、良い意味でひとつだけ。私を縛ってきた規定の価値観のようなものから解放されたこと。固定観念の殻から脱皮して自由になりましたね。眼鏡をはずして裸眼で見る気持ちよさ、何でも来いと思える強さ、ちょっと曲がっていても好きなだけ立てるアンテナ。

日本のアートシーンに対して言いたいことは、お行儀が良いのも大事なのですが、わがままを通すことの愉快さも忘れてほしくない。アートを愛するのって究極のわがままゲームに嬉々と参加することではないでしょうか。 作り手、受け手にかかわらず、これを表現したい、作りたい、見せたい、見たい、見せない、知りたい、手に入れたい・・・。率直な欲求。

一見団体活動のように思われるアートシーンというものも、実は確固とした「わたし」が、決してブレンドされることなしに寄り集まったもの。誰とも違う「わたしはこうする！」というパワーを武器に、どんどん新しいフィールドを開拓していってほしいと思います。

*マルティプル…複数存在する芸術作品・立体物のこと。

courtesy:TOMIO KOYAMA GALLERY photo:(c)2000 Yoshitomo Nara

NOT AFRAID（勇気を持って）！ ▶▶

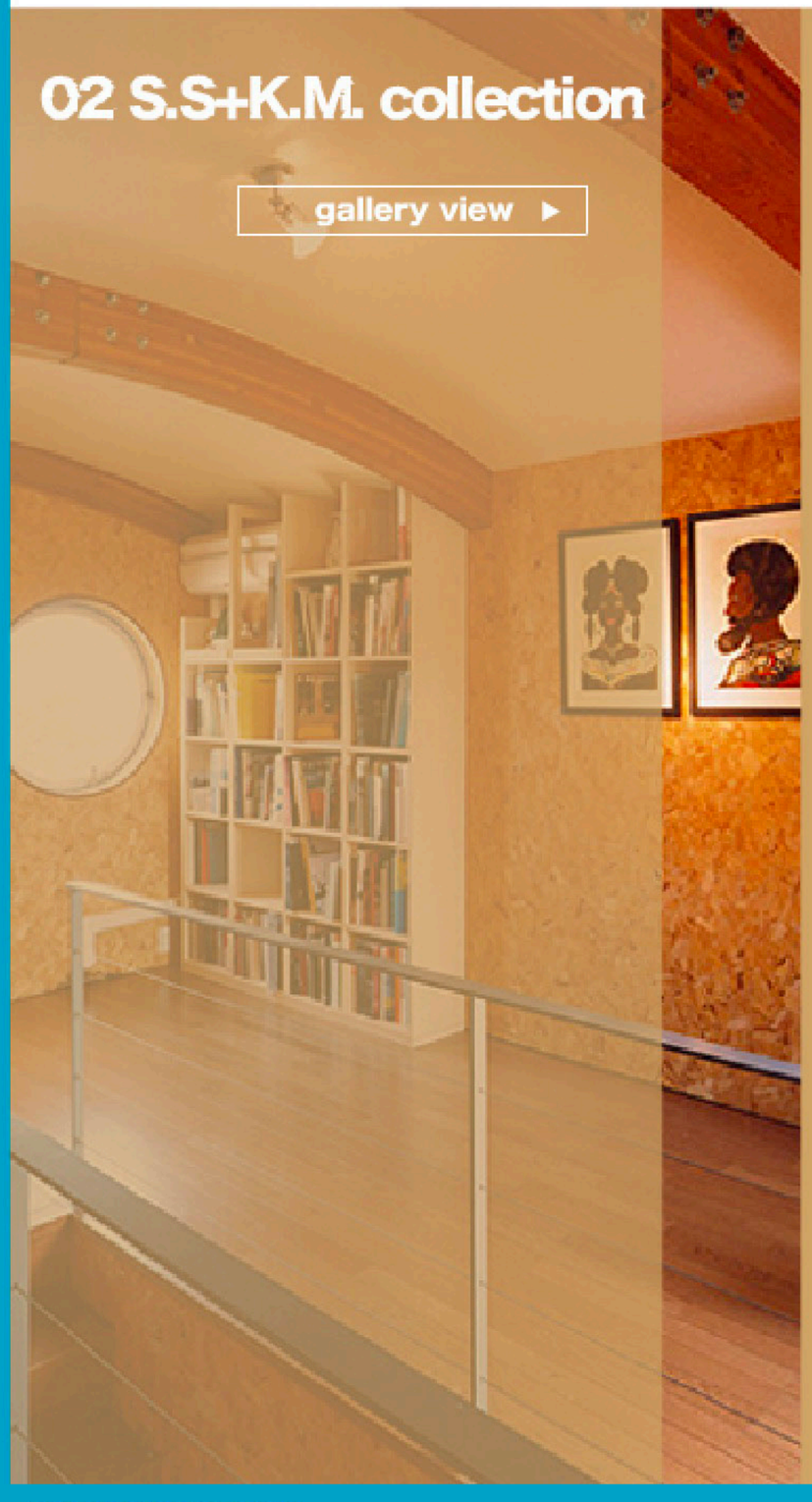
O.S. collection 03
O.N. collection 04
T.R. collection 05
M.H. collection 06
Ugeyan collection 07
382 collection 08
S.H. collection 09
TOC collection 10

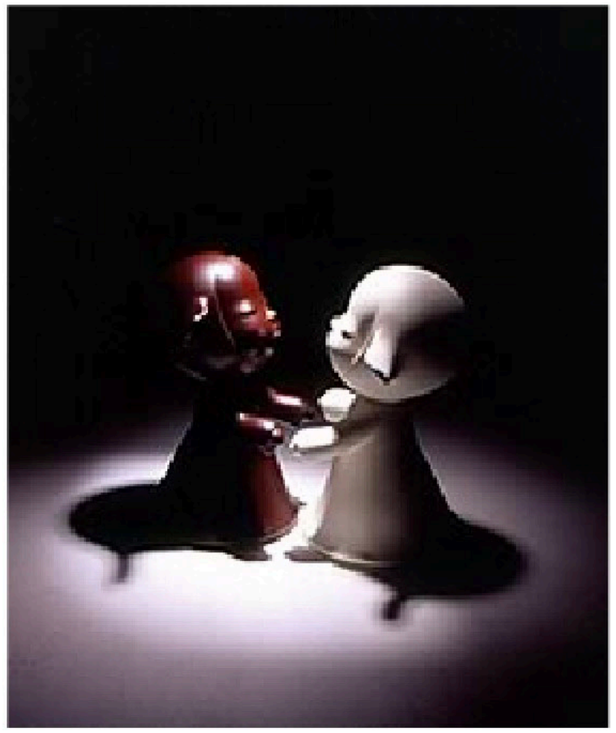
アートがあれば　WHY NOT LIVE FOR ART?

other collections

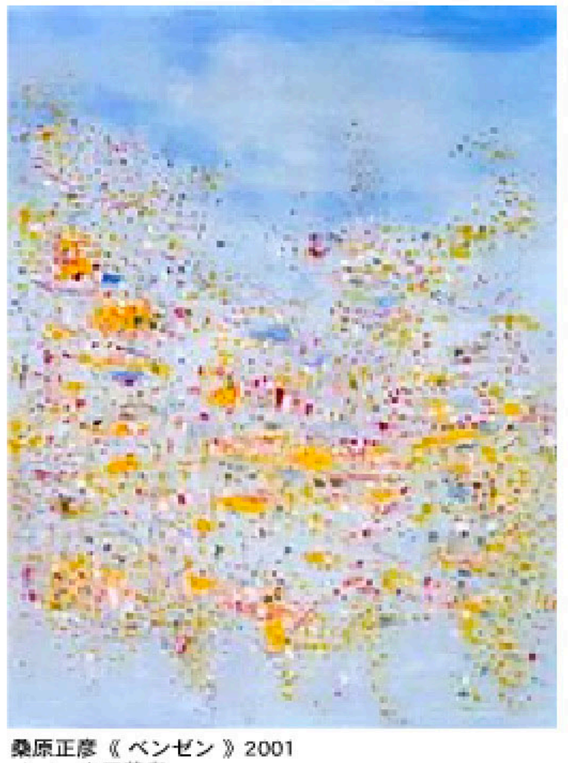
02 S.S+K.M. collection

gallery view ▶





奈良美智《 チョコレートピルグリム
Little Pilgrims-Night Walking》　2000
© 2000 Yoshitomo Nara. courtesy 小山 登美ギャラリー

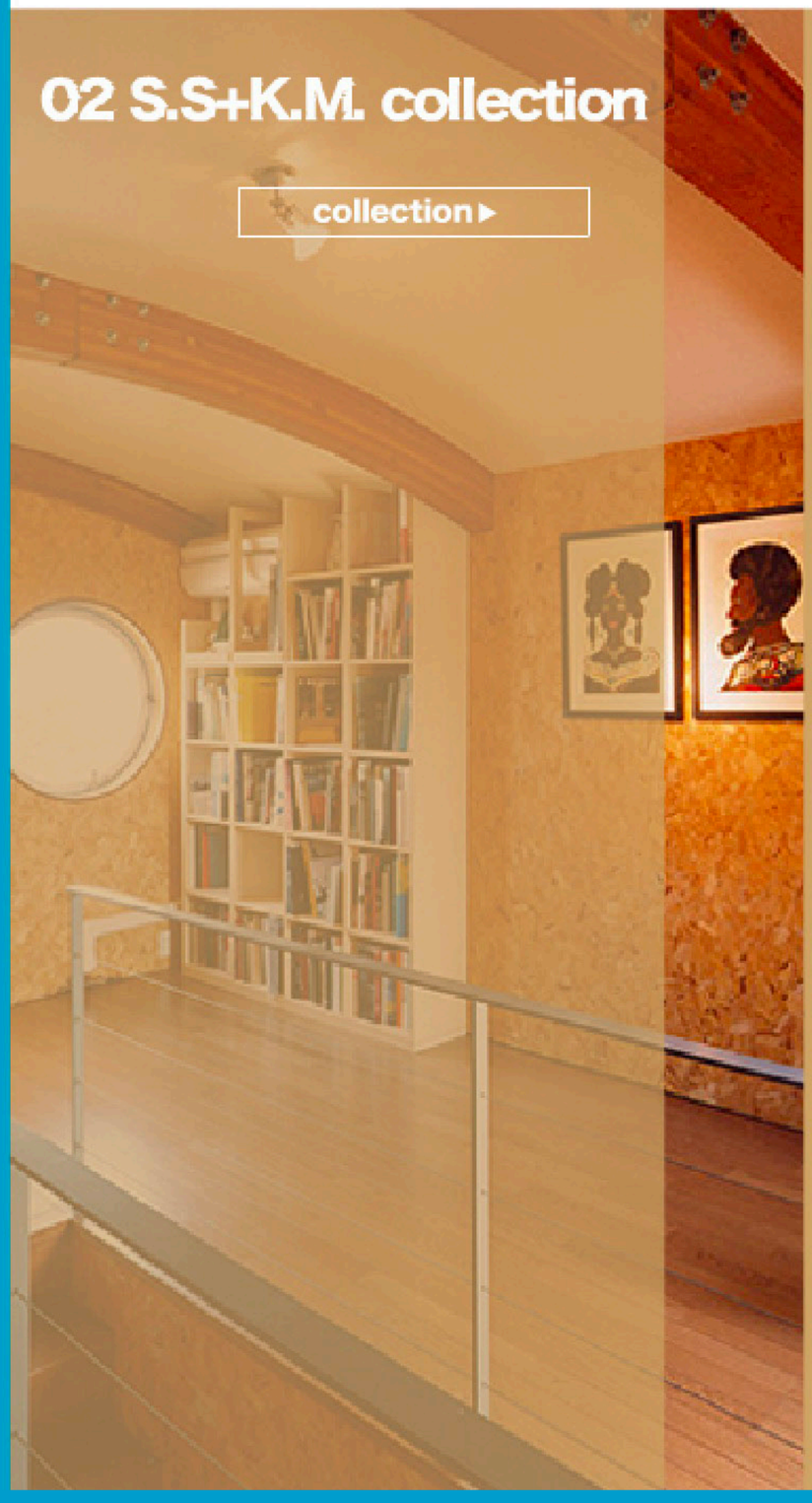


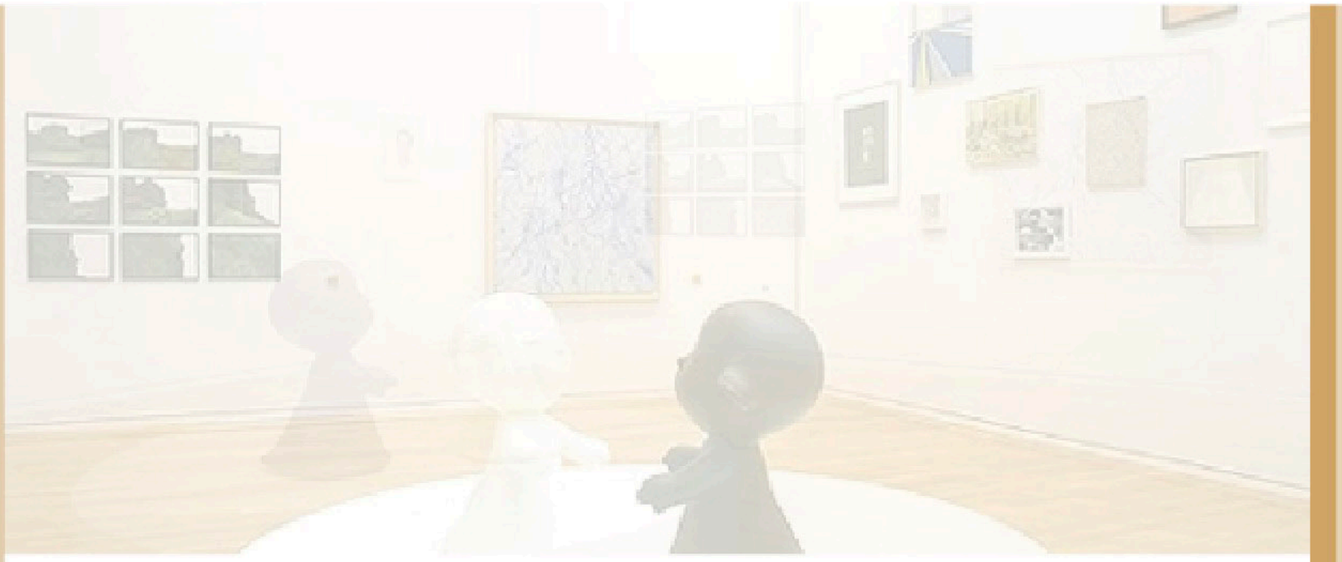
桑原正彦《 ベンゼン 》2001
photo 内田芳孝
courtesy 小山 登美ギャラリー

ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY

02 S.S+K.M. collection

collection▸





S.S.+K.M. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

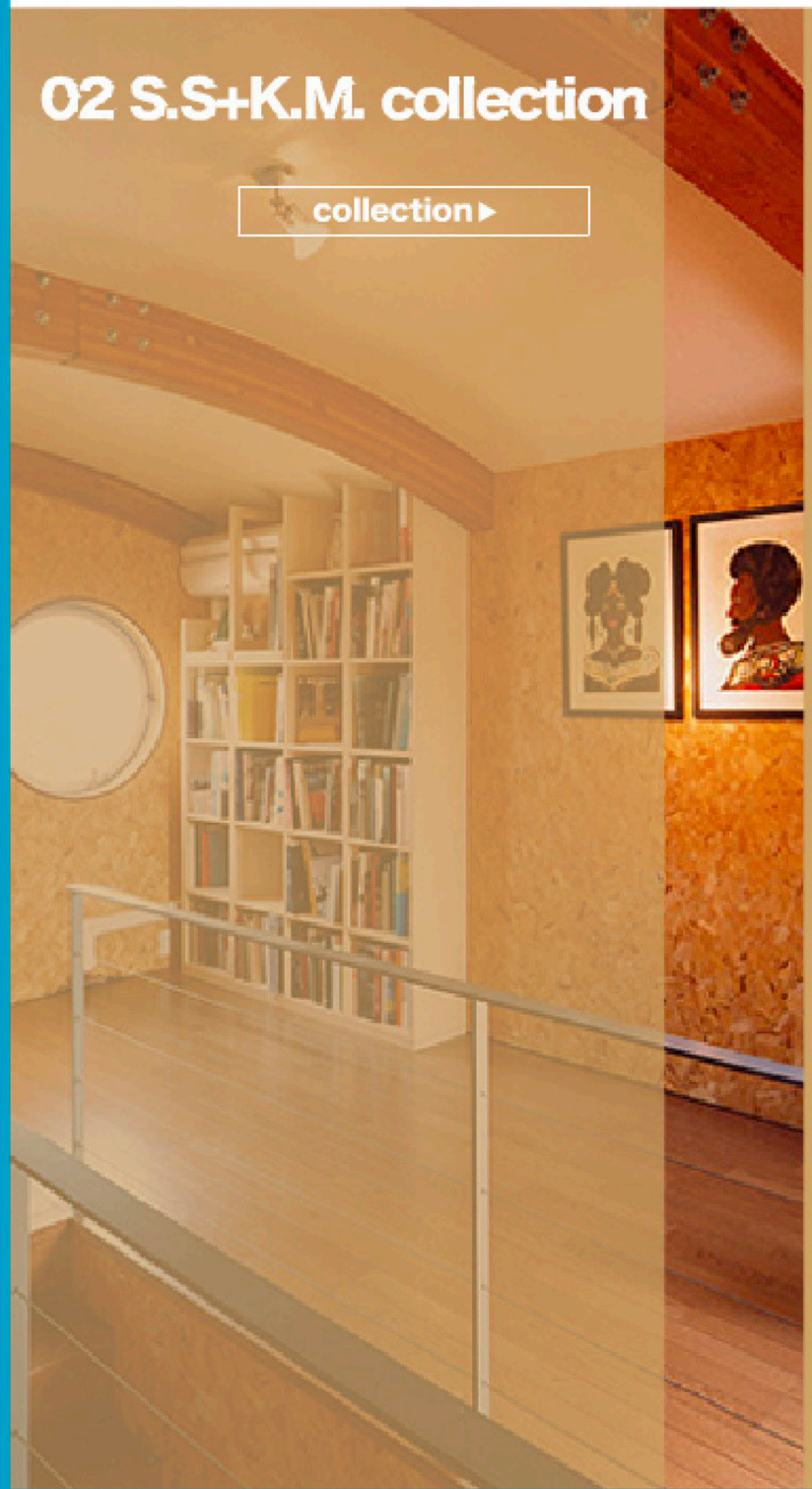
Interview

NOT AFRAID（勇気を持って）！

S) もともと小さい時からアートは好きで、学校の美術部で絵を描いたり、展覧会を見に行ったりしていた。ポスターやポストカードを買って飾ったりもしていたけれど、初めて作品を買ったのは学生時代。アルバイトをしたお金で版画の作品を買った。２～３万円ぐらいだったと思う。それと、その頃音楽を通じて知り合った友人が、ギャラリーの仕事をするようになったので気軽にギャラリーに行ったりしていた。それでギャラリーにも垣根を感じなかったのかも。

K) 私は働き始めてまもなくイタリア旅行に行って、サンマルコ美術館の近くで版画を２点買ったのが初めてだった。他に服やらバッグやらショッピングを楽しんだけれど、この版画を買った喜びみたいなものは今でも覚えている。コレクションを始めたのは、二人で一緒にギャラリーに行くようになってから。1986年位からかな。最初、現代アートは難解でやや抵抗もあった。当時彼は、気に入った作家のかなり大きなサイズの作品を買いたがっていて、少し驚いた。

S K)　　とりたててコレクションのテーマというのはない。他の人たちが見れば何か



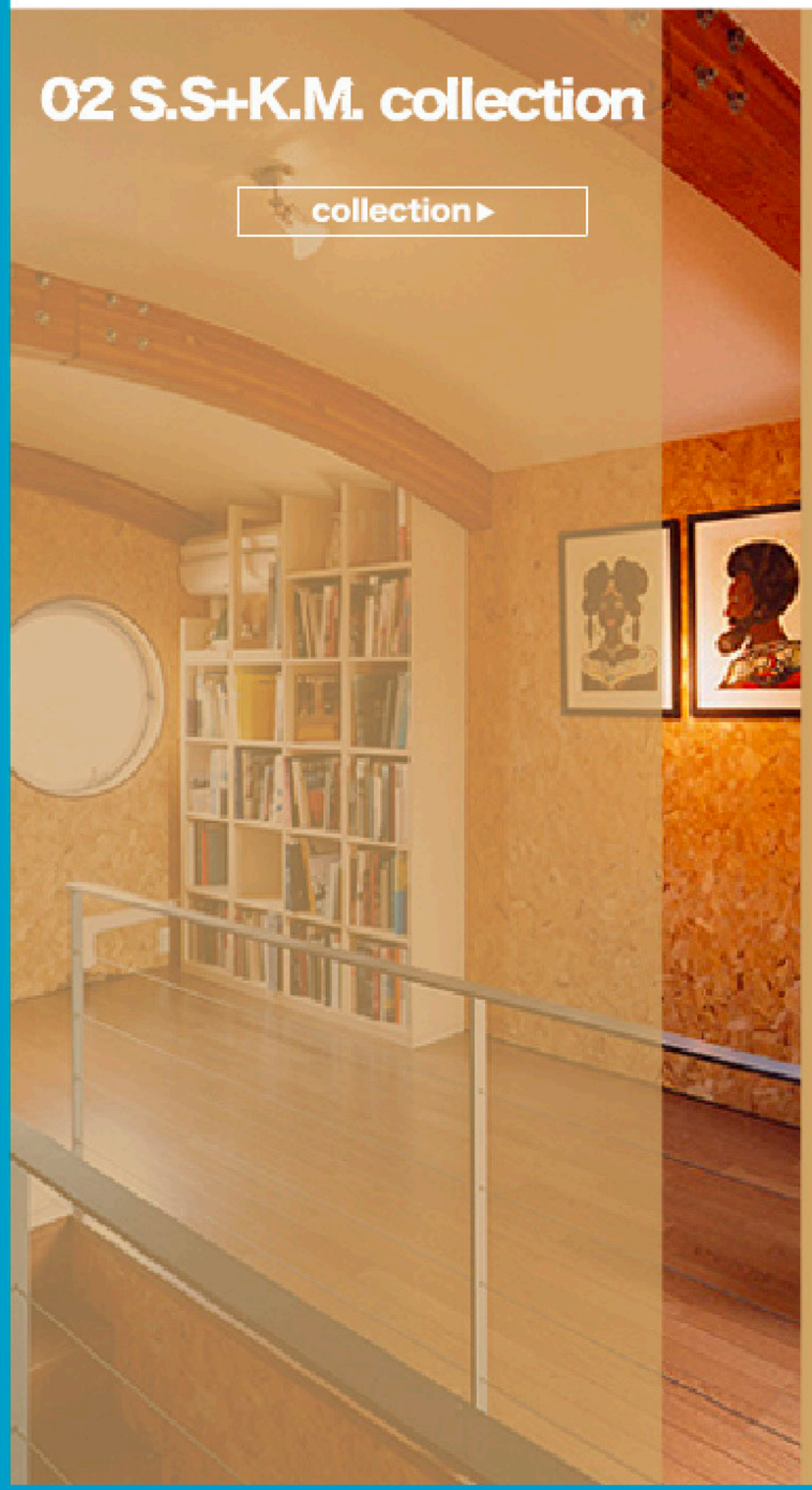
S.S.+K.M. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

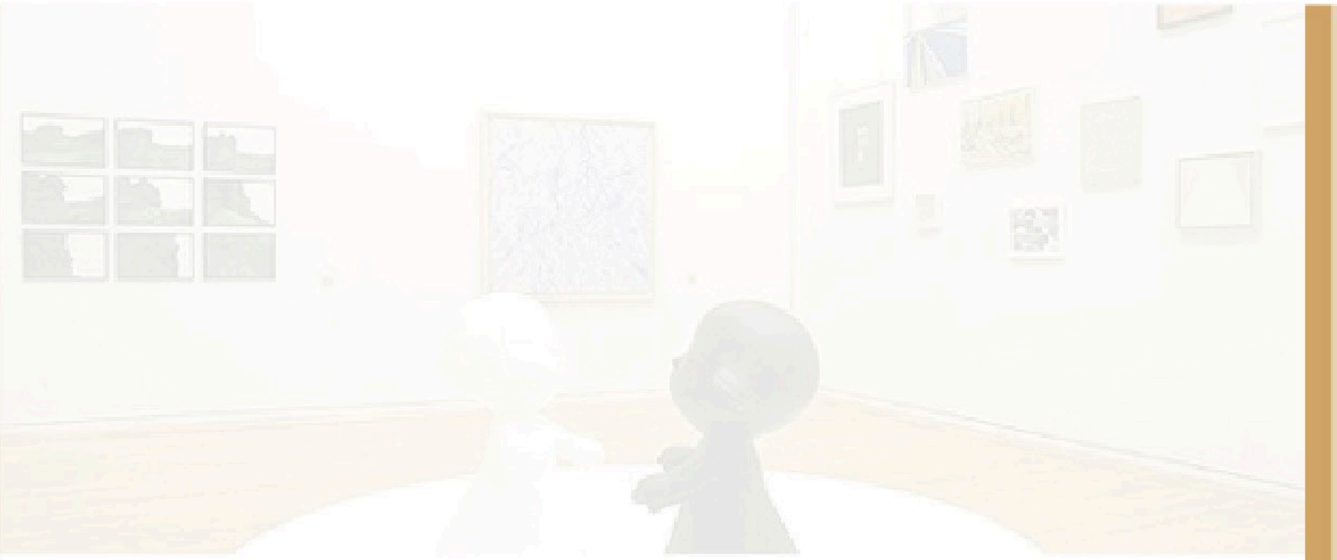
Interview

S K)　　とりたててコレクションのテーマというのはない。他の人たちが見れば何か傾向が見えてくるのかもしれないけれど、気に入ったり気になるものを購入した結果なんだと思う。ただ「同時代」感とか「リアリティ」というのは重要なキーワード。
以前はあまり買わない時期もあったりしたが、ここ10年ぐらいは継続して購入している。特別に意気込んだり、計画性があるということでもないけれど、友達感覚でつき合える同世代の作家やギャラリストが周りに増えたことは影響していると思う。作品を買うという行為は、時には勇気を必要とするが、友達やギャラリスト、キュレーターや評論家などの感想や意見、それに作家本人の話を聞くことで気持ちを後押しされたりする。そのくり返しでアートシーンに関する情報はずいぶん増えていった。海外のアートフェアやギャラリー、ビエンナーレなどに行くと、情報やネットワークが一層広がって、アートがもつボーダレスな、世界共通言語としての魅力をもっと感じるようになる。
　作品はその時々、真剣にそして自然に出会ってきた。そういう意味ではすべてが運命的な出会いなのかな。
コレクションのアーティストの総数は70～80人。国内・外の区別はあまり意識せず「面白ければ何でも」といった気持ちで集めてきて、気づいたら大体半々くらいになっていた。けれどやっぱり日本の若手アーティストは応援したい。作品について感じたことを気軽に

02 S.S+K.M. collection

collection▸





S.S.+K.M. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

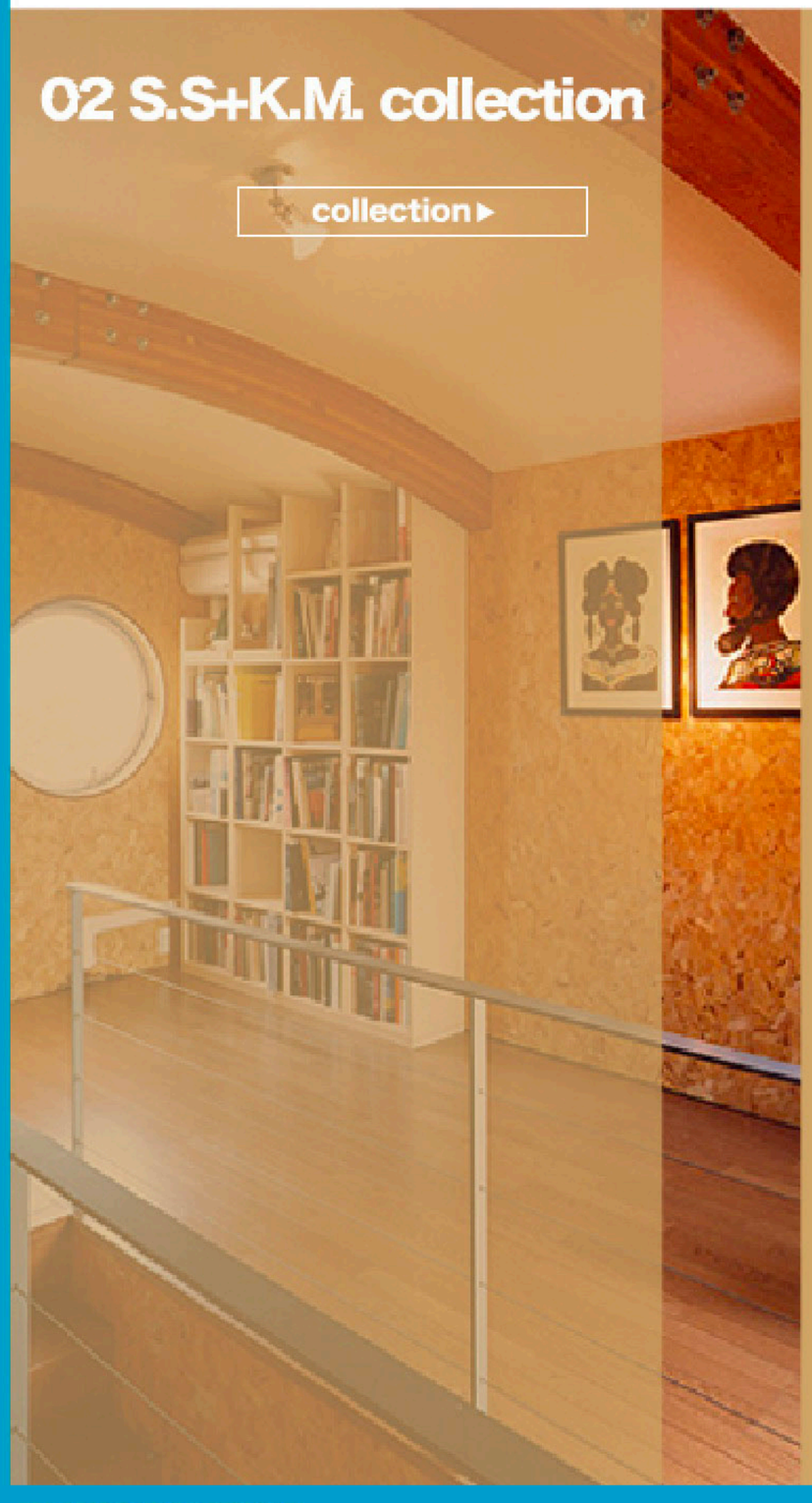
Interview

コレクションのアーティストの総数は70～80人。国内・外の区別はあまり意識せず「面白ければ何でも」といった気持ちで集めてきて、気づいたら大体半々くらいになっていた。けれどやっぱり日本の若手アーティストは応援したい。作品について感じたことを気軽に話したり、気になることを質問できたりするのも楽しい。

K)　ごく自然に身の回りに作品がある暮らしをしているので、それがない生活はなかなか想
像がつかない。食事をしたり、CDを聞く同じ空間にアートがあると、自分が好きな、大切にしたいことがはっきり見えてきて、じんわりと幸せな気持ちになる。
アートは既存のカテゴリーに捉われることなく自由な発想と表現方法を模索し続けるところがあって、そこが魅力。
S)　日々の暮らしの中で作品を見ると、ギャラリーや美術館で見るのとは違った発見があったり、こちらも元気づけられたり救われたりする。作品は「インテリアの一部」ということではなくて、もっと自分たちとフィフティで対等な関係のイメージ。作家や作品の思わぬ発想、自由な感性に日常の中で触れられるのが喜びになっている。
K)　作品を購入する時はいつも合議制で、これまで意見が分かれたことはほとんどな

02 S.S+K.M. collection

collection▸

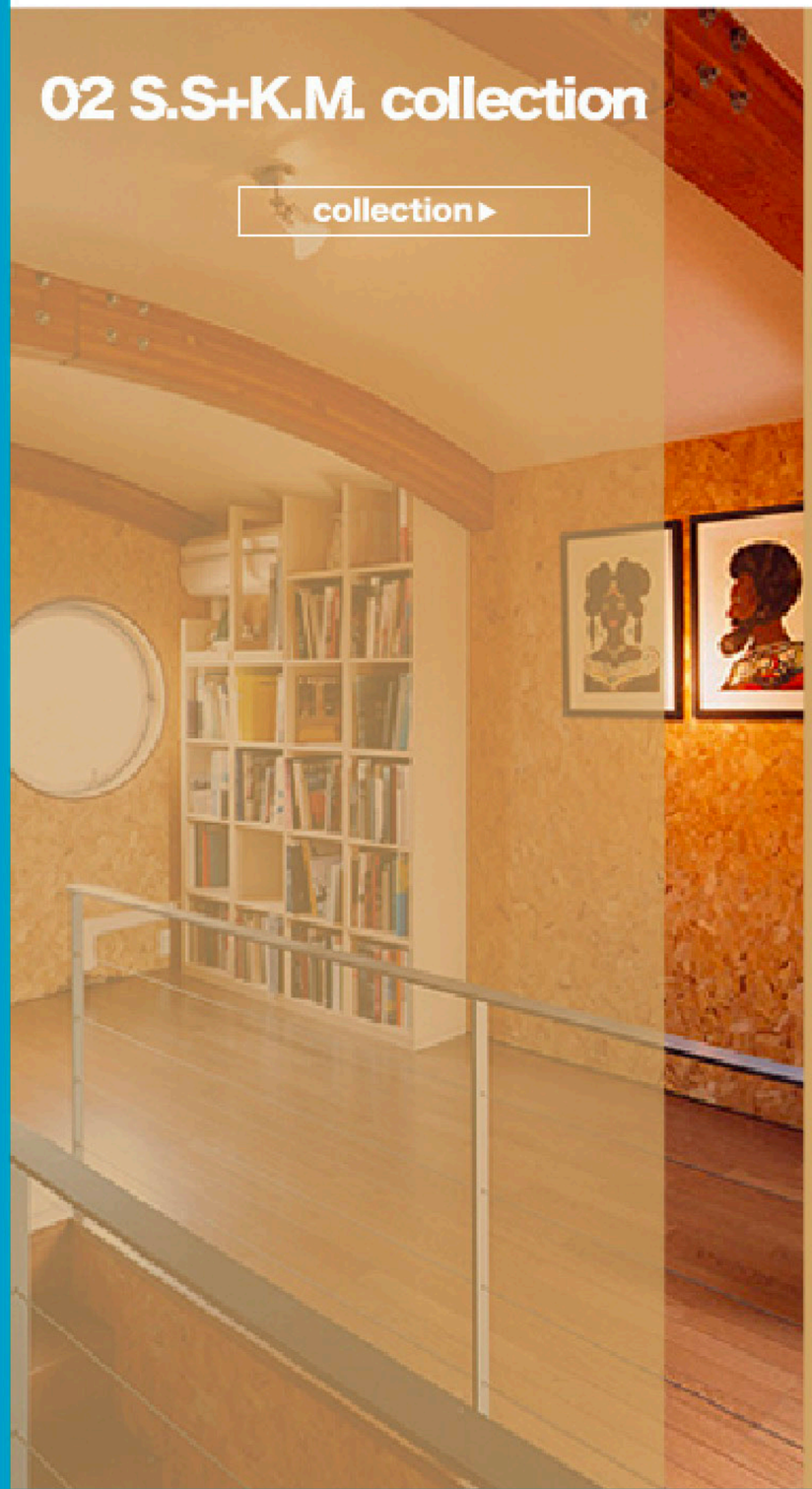


S.S.+K.M. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

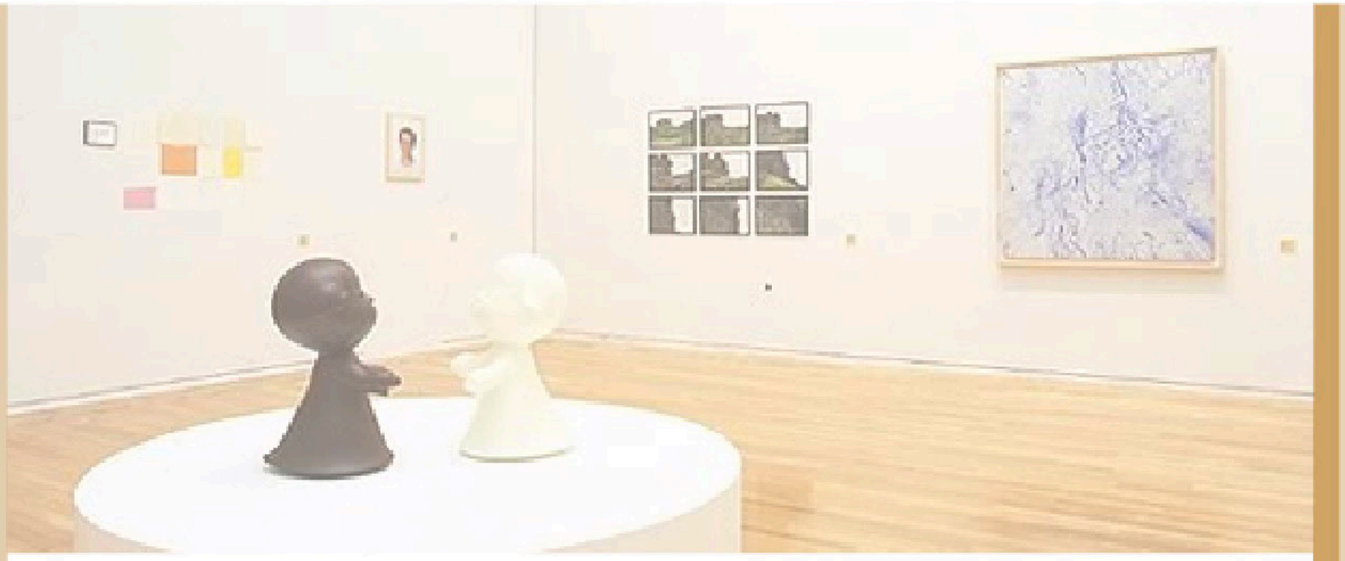
K)　作品を購入する時はいつも合議制で、これまで意見が分かれたことはほとんどなかった。というより、わりと二人で納得するまでじっくり時間をかけることが多いから、それも楽しみになっているのかもしれない。購入した作品はできるだけ家で見られるようにしたいと思っている。スペースも限られているので、気分によって、季節によって、また友達を呼んだりする時に作品を取り替える。これも楽しみの一つ。

S K)　これからもアーティストには、勇気をもってどんどんいろいろな表現にチャレンジしてほしいな。特に日本の若いアーティストには頑張ってほしい。見る側の私達にも勇気が必要で、作品に接した時いつも何かを感じ取れるようでいたいと思う。だからこちらが試されているように感じることも多々あって、その意味で買う立場の私達としても“NOT AFRAID（勇気を持って）！”という気分。
アートを支える美術館やギャラリーには、あまり難しくなりすぎず普通の人達がアプローチしやすい環境を考えてほしい。アートは素晴らしいものだけど、決して特殊なものではないはずなのだから。
素直に、そして自由にどんなことでも感じられるようにすることが、大切なことのように思う。そして何か心に引っかかることがあれば、もう少し進んでそれに向き合ってみるこ



02 S.S+K.M. collection

collection▸



S.S.+K.M. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

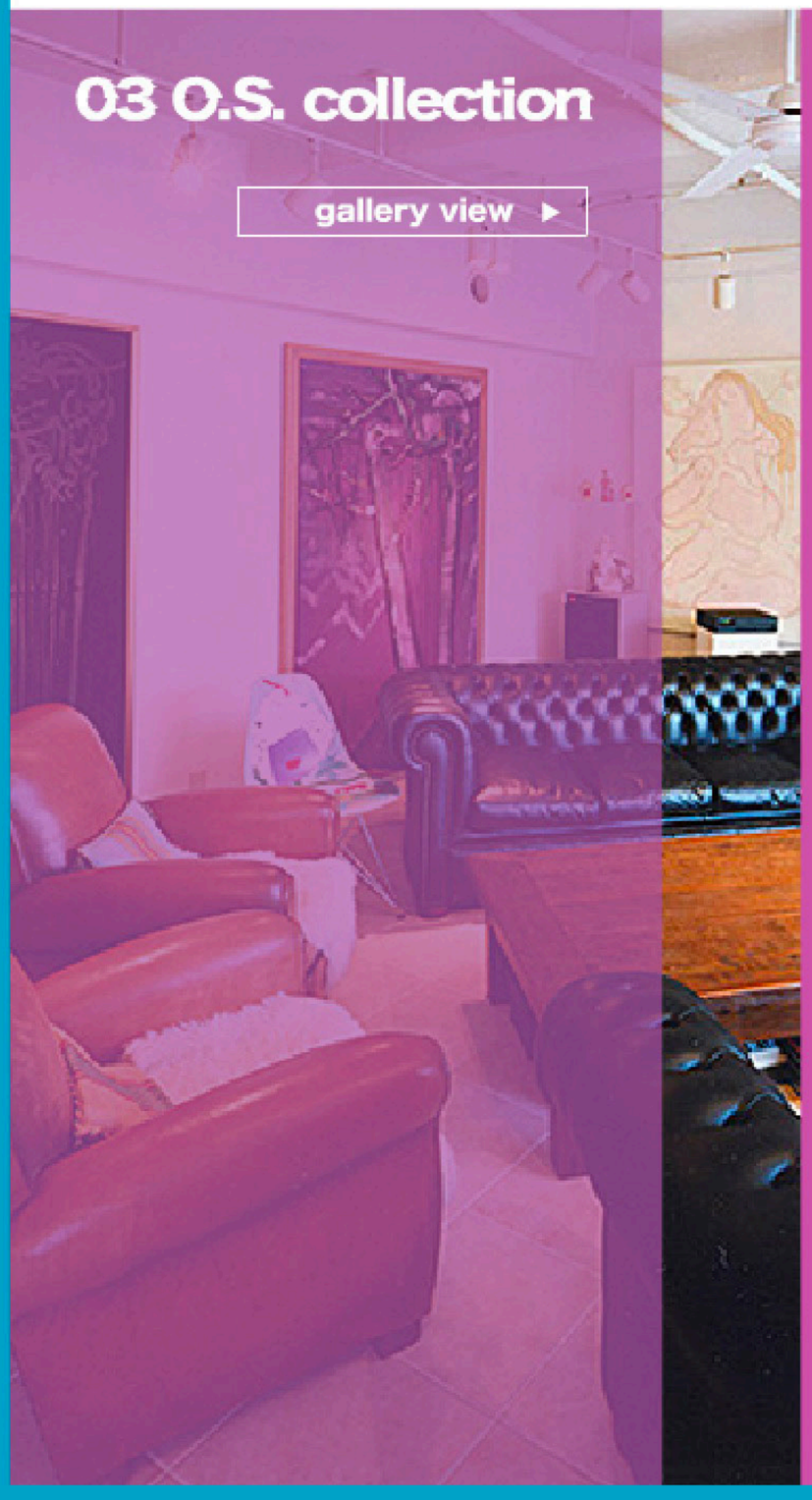
Interview

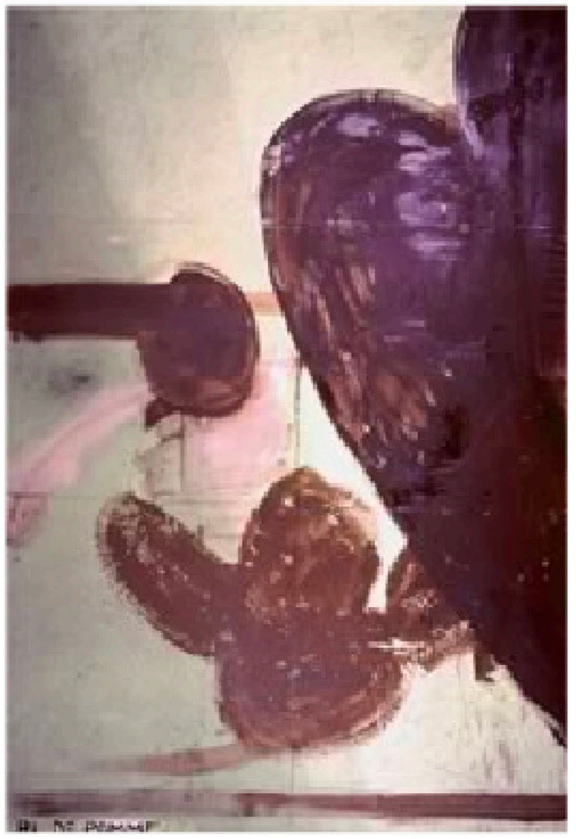
かった。というより、わりと二人で納得するまでじっくり時間をかけることが多いから、それも楽しみになっているのかもしれない。購入した作品はできるだけ家で見られるようにしたいと思っている。スペースも限られているので、気分によって、季節によって、また友達を呼んだりする時に作品を取り替える。これも楽しみの一つ。

S K)　これからもアーティストには、勇気をもってどんどんいろいろな表現にチャレンジしてほしいな。特に日本の若いアーティストには頑張ってほしい。見る側の私達にも勇気が必要で、作品に接した時いつも何かを感じ取れるようでいたいと思う。だからこちらが試されているように感じることも多々あって、その意味で買う立場の私達としても“NOT AFRAID（勇気を持って）！”という気分。
アートを支える美術館やギャラリーには、あまり難しくなりすぎず普通の人達がアプローチしやすい環境を考えてほしい。アートは素晴らしいものだけど、決して特殊なものではないはずなのだから。
素直に、そして自由にどんなことでも感じられるようにすることが、大切なことのように思う。そして何か心に引っかかることがあれば、もう少し進んでそれに向き合ってみることで、新しいものが見えてくるかも、とも思う。

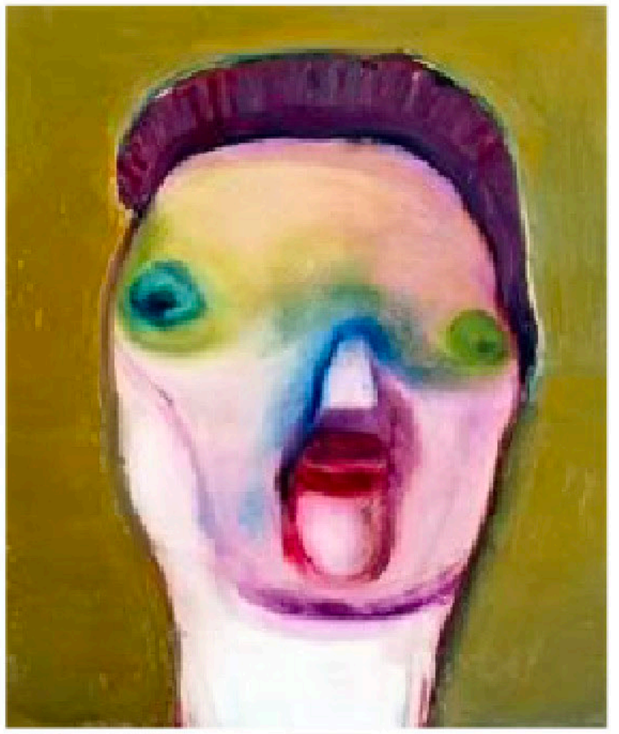
courtesy ;TOMIO KOYAMA GALLERY

心地よい強迫観念に導かれて ▶▶





ジュリアン・シュナーベル《 Ri De Pomme III 》
1988　courtesy 小山 登美ギャラリー

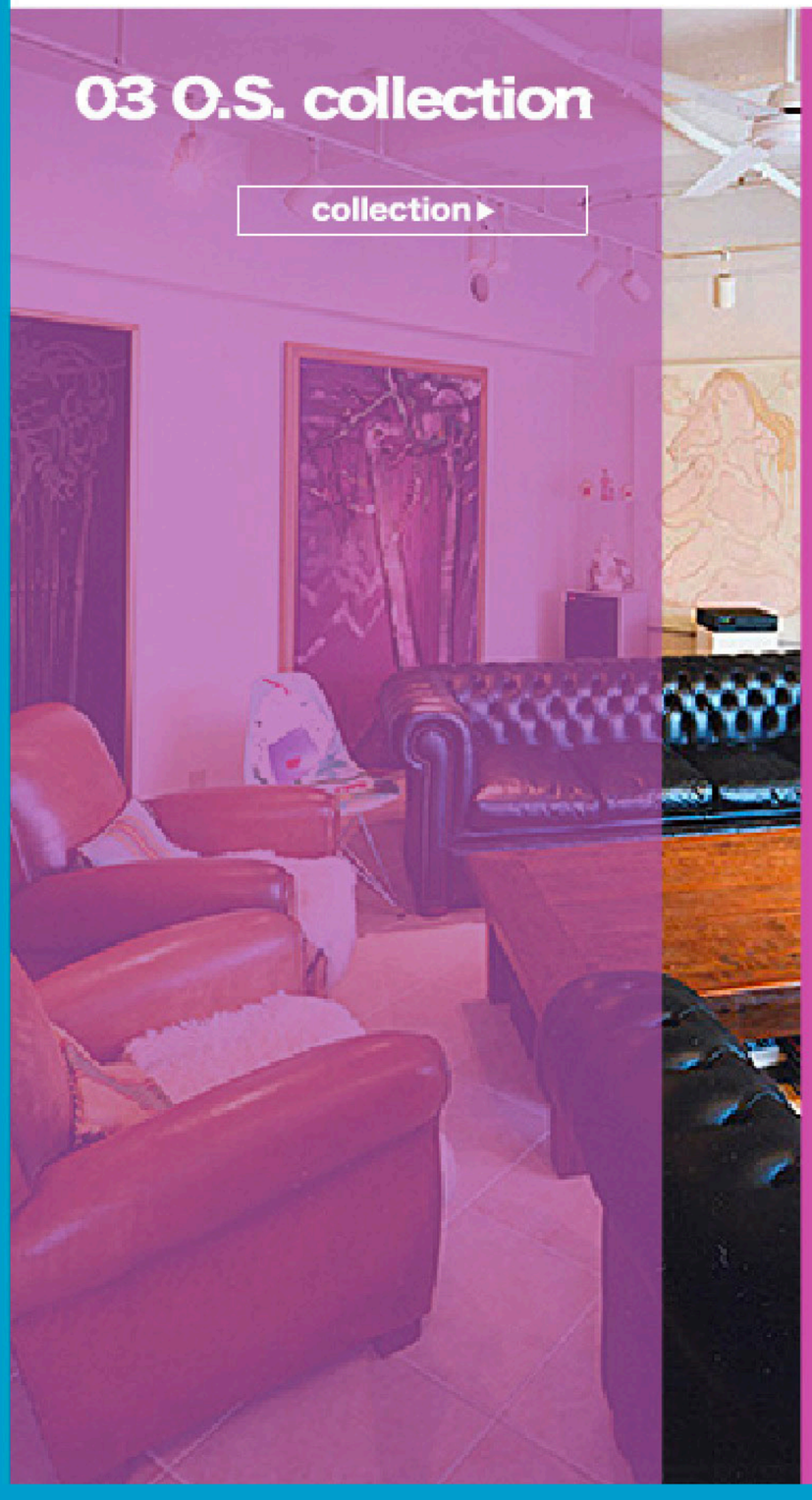


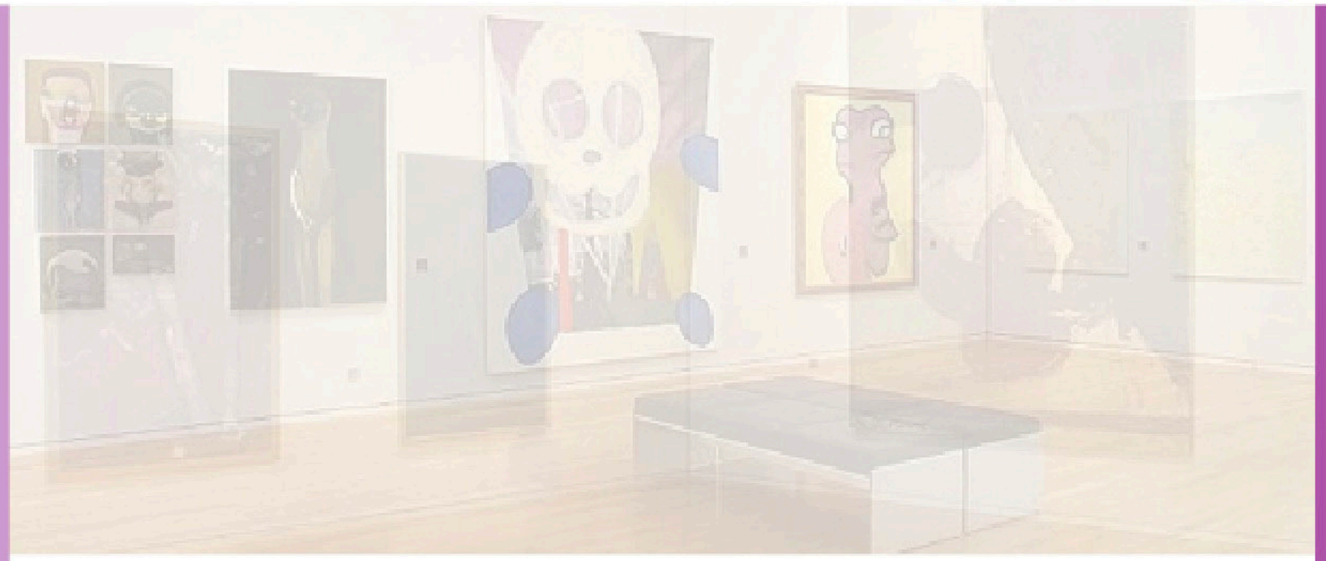
加藤泉《 無題 》2000
photo 小坂雅史

思春期の反抗心と相まって、ダダやシュールレアリスムに憧憬を抱いていた中・高生時代。その後、同時代に起こっていたニュー・ペインティングのムーヴメントに強い衝撃を受け、代表画家のジュリアン・シュナーベル（1951– / アメリカ）のポスターに出会ったことがコレクションの原点となる。現在でもシュナーベルがヒーローであり続けている。意識して収集をしているつもりはないものの、縁あって出会い、「自分の手元におかねば」という心地よい強迫観念に導かれた作品が、自然に増えていったコレクション。シュナーベルのほかコレクションには、幼児と昆虫が融合・解体したような人物像を描く加藤泉（1969–　　）、ミュータント的生物をモチーフにした作品で知られる桑原正彦（1959– ）、人間と社会の変容をテーマに、ダイナミックなペインティングで国際的に活躍している太郎千恵蔵（1962– ）など、人間の深層に訴えかける、奇妙な不安定感を感じさせる作品が多数ある。

03 O.S. collection

collection▶





O.S. collection gallery view photo:Kioku Keizo

Interview

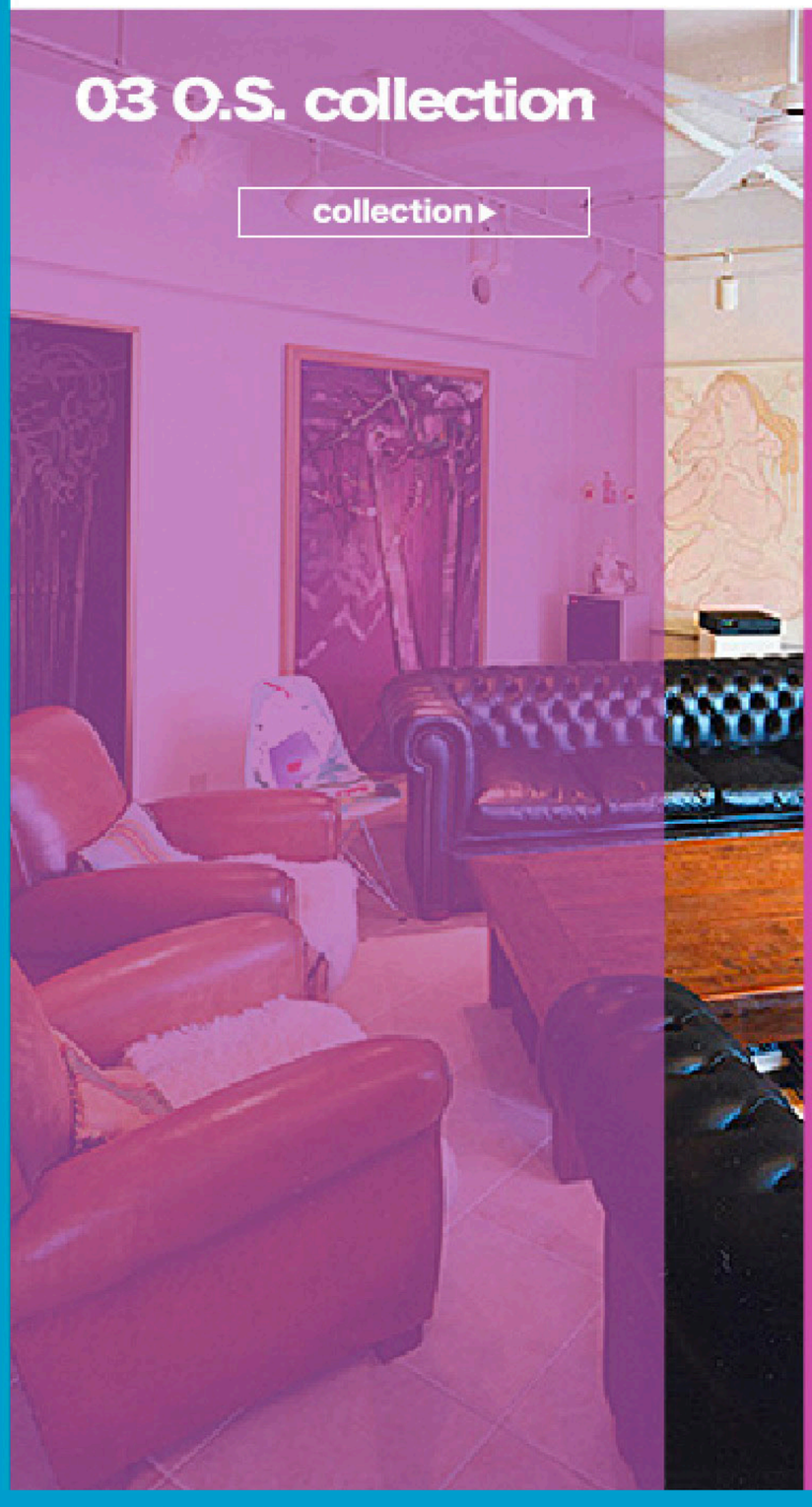
心地よい強迫観念に導かれて

コレクションについて特にテーマがあるわけではない。ある種の必然性によって作品が集まってきただけだ。それでもあえてテーマを挙げるとするならば、「自分が生きている」ということかもしれない。そもそもコレクターと言われること自体、未だに抵抗感がある。物質主義者のように思われるのが嫌だし、本来自分はその対極にいるような人間なので。少し大袈裟に言えば、その作家や作品と共闘しているような気分でいる。作品はモノではあるが同時にメタな存在。刺激を与えてくれたり何かを発見させてくれたり、時には自分自身の内面を投影する鏡になったり。だからコレクションを人に見られると、日記を見られたような心の一番深いところを覗かれる気恥ずかしさを感じるのかもしれない。

小さい頃から将来何になりたいのと聞かれると、決まって「画家」か「精神科医」になりたいと答えていた。元々絵を描くことが好きだった。また、当時父が地方の病院の勤務医をしていて病院の官舎に住んでいたが、向かい側が精神科病棟だったことも影響したのかもしれない。どちらの世界もどこか神秘的で非日常的な深淵な世界を感じさせてくれたのだと思う。ルオーから広重までを小さく横写しては秘密の場所に埋めたりしているような

03 O.S. collection

collection▶



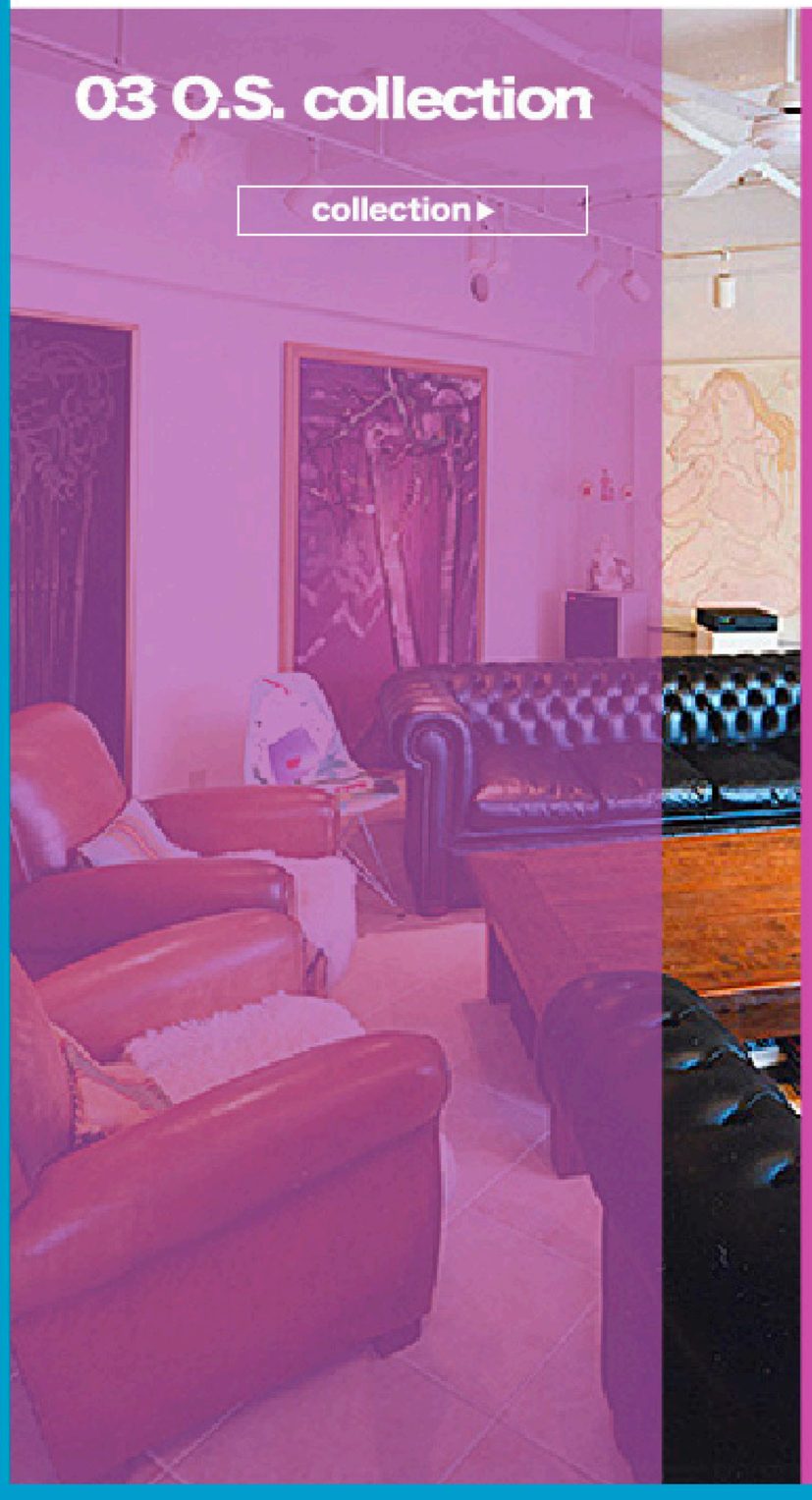
O.S. collection gallery view photo:Kioku Keizo

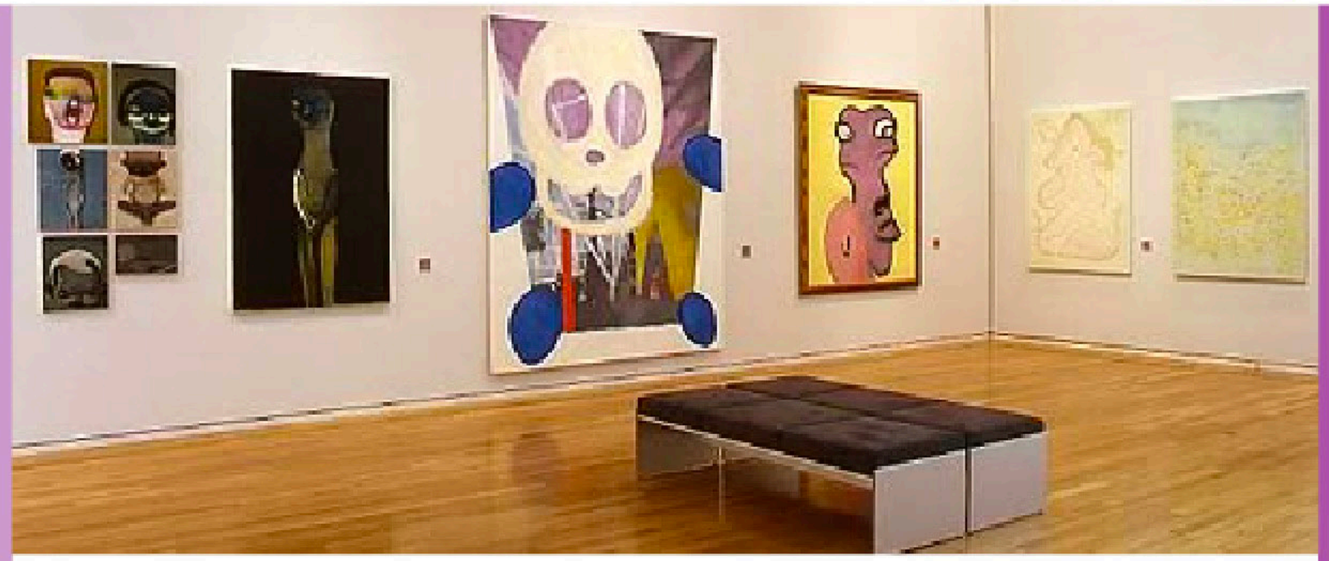
Interview

だと思う。ルオーから広重までを小さく横写しては秘密の場所に埋めたりしているような変な子供だった。中学生の頃に無意識の世界を表現するシュルレアリスムに出会い、アンドレ・ブルトンを通して瀧口修造やマルセル・デュシャンの存在を知った。そこから現代美術の流れに興味を持つようになった。当初は時代を遡った過去の作家や作品に興味があったが、徐々に現存の作家に興味が移行した。特に大学生の頃、同時代的に出会ったニューペインティングのインパクトは大きかった。とにかくかっこよかった。自分が大人になりかけてきた頃の活発な精神の昂揚と、大きなキャンバスに奔放に絵具をぶつける表現主義的な手法に共鳴したのだと思う。なかでもジュリアン・シュナーベルは僕の中でヒーローだった。ある時街なかで大きなシュナーベルのポスターを見つけ、その瞬間「これは部屋になければいけない」と思い、買った。当時の10万円は大きな出費だった。今も大切にしているそのポスターが最初のコレクションかもしれない。その後大学に通いながら、美術塾のようなところに通った。その時の先生が赤瀬川原平だった。そこでいわゆる日本の前衛についていろいろ知ることができて、日本人の作家への興味が次第に大きくなっていった。何よりも作家本人と話をしたり、一緒に酒を飲んだり御飯を食べたり、家に遊びに来てもらったり、アトリエを訪ねたりなど何らかの関係性を持てることが楽しい。

03 O.S. collection

collection▶





O.S. collection gallery view photo:Kioku Keizo

Interview

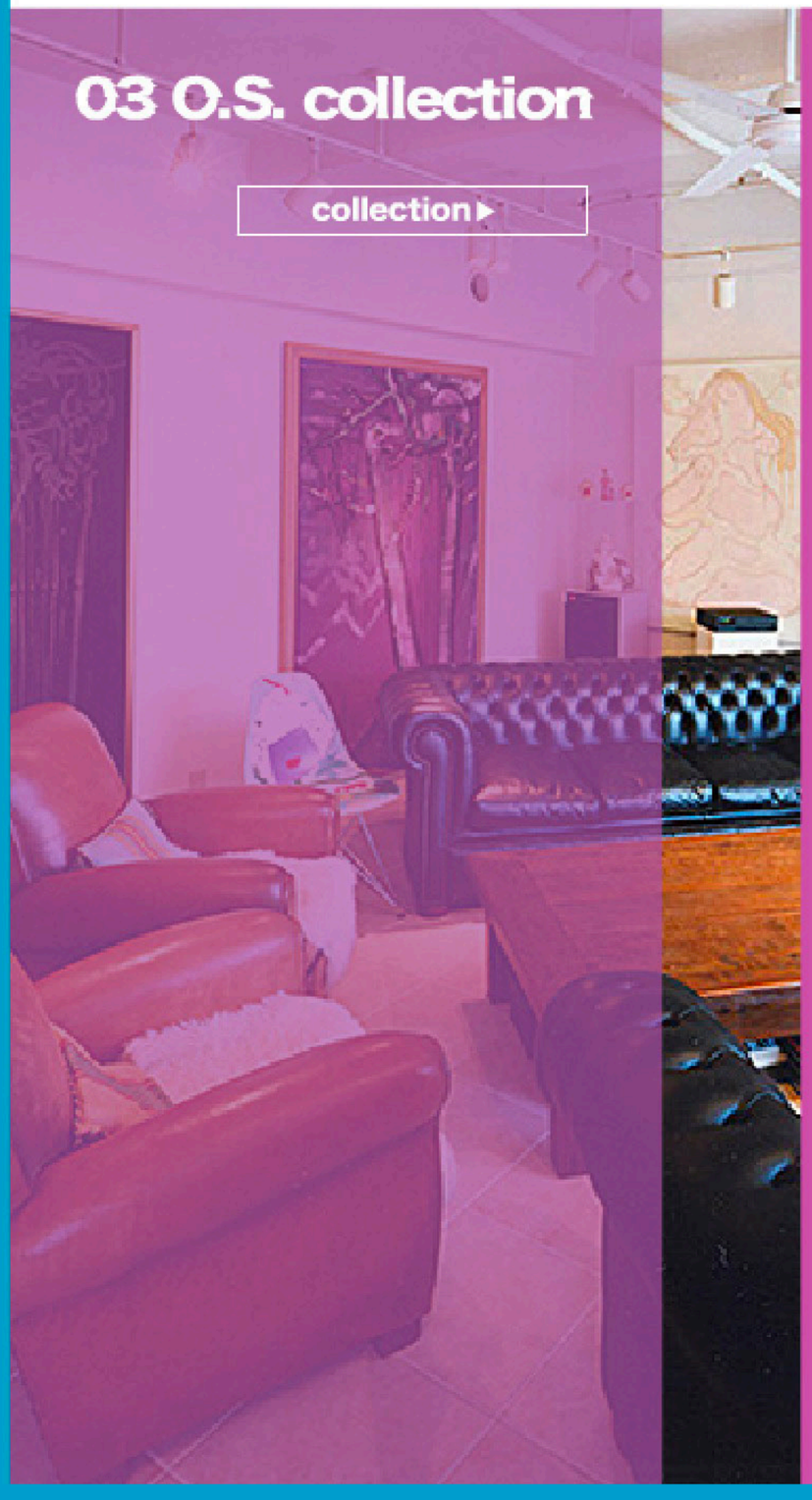
に遊びに来てもらったり、アトリエを訪ねたりなど何らかの関係性を持てることが楽しい。

ポスターを買った時から現在まで、一貫して作品購入時の感覚は変わらないように思う。「この作品はどうしても自分に必要だ」というある種の心地よい強迫観念のようなものに支配されているように感じる。集まってきた作品は基本的にすべて飾るようにしている。作品と日常生活を共にすることでしか得られない刺激や発見。これが一番大切なことだと思う。だから煙草の煙や日光にさらされたとしても構わない。購入する時には自分が生活している空間にその作品が存在しているイメージを思い浮かべるようにしている。良い作品と出会っても、どうしてもそのイメージが持てない時は、縁がなかったと諦める。

結局精神科医になったわけだが、最近はよく精神医療とアートでは随分違うね、と言われることがある。しかし僕のなかではあまり差異はない。関わる意識の根底には「人間をより深く知りたい（もちろん自分自身を含めて）」という欲求があるのだと思う。乱暴な言い方をすれば、患者さんは精神の病理として、作家は作品としてそれぞれ自己の問題や内

03 O.S. collection

collection▶



O.S. collection gallery view photo:Kioku Keizo

Interview

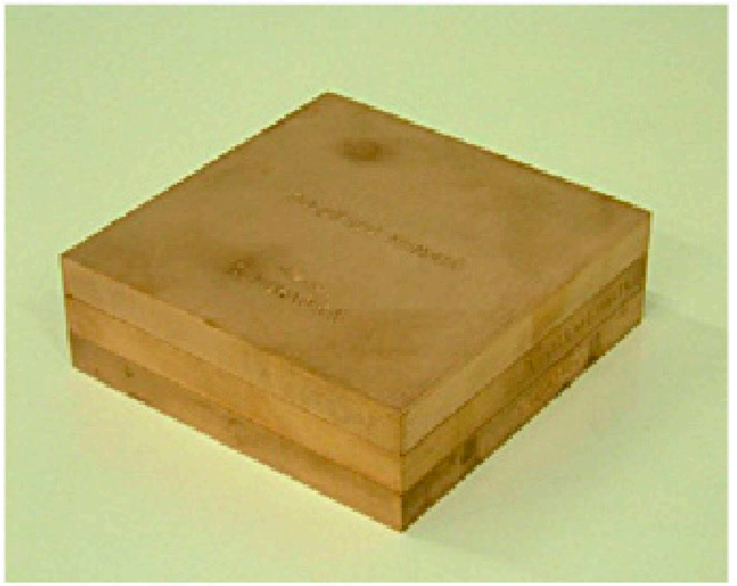
結局精神科医になったわけだが、最近はよく精神医療とアートでは随分違うね、と言われることがある。しかし僕のなかではあまり差異はない。関わる意識の根底には「人間をより深く知りたい（もちろん自分自身を含めて）」という欲求があるのだと思う。乱暴な言い方をすれば、患者さんは精神の病理として、作家は作品としてそれぞれ自己の問題や内面を表現しているのだと思う。何となく絵が好きな先生ということが伝わり、大勢の患者さんが自分の描いた作品を持ってきてくれる。時にはとても良い作品に出会うこともあり、そんな時はオーソライズされた作家の作品を手に入れた時と全く同質の喜びを感じる。

こうして現在までどんどん作品は増え続け、自宅の壁という壁には自分が生きてきた痕跡のように作品が掛けられていったわけだが、残された最後の壁が埋められたのは折しも「9.11」に直面した時期だった。世界の価値観が一転し、アートのあり方も再考されなければならなくなった時期とコレクションが一段落した時期とが重なり「このままではいけない」という新たな強迫観念が自分のなかに生まれたように思う。ポストポストモダン社会にまどろむ私たちを覚醒させ、アート本来の存在意義を実感させる幻想を抱かせてくれるような作家や作品に対して、微力ながら何らかの応援ができればと考えている。

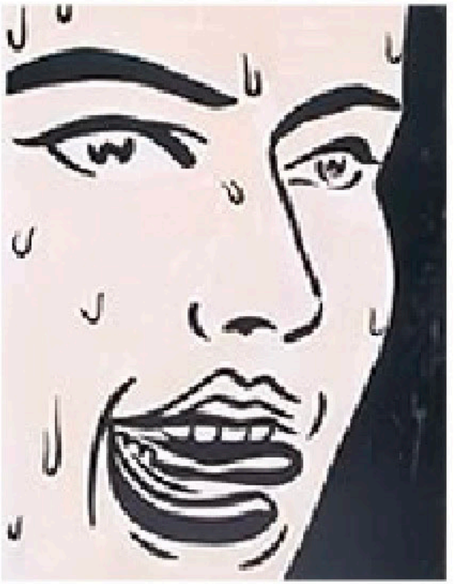
BEGINNINGS—「始まり」の現場 ▶▶

04 O.N. collection

gallery view ▶



村岡三郎《記憶体（マルティプル）》
1997/2003
courtesy 東京パブリッシングハウス

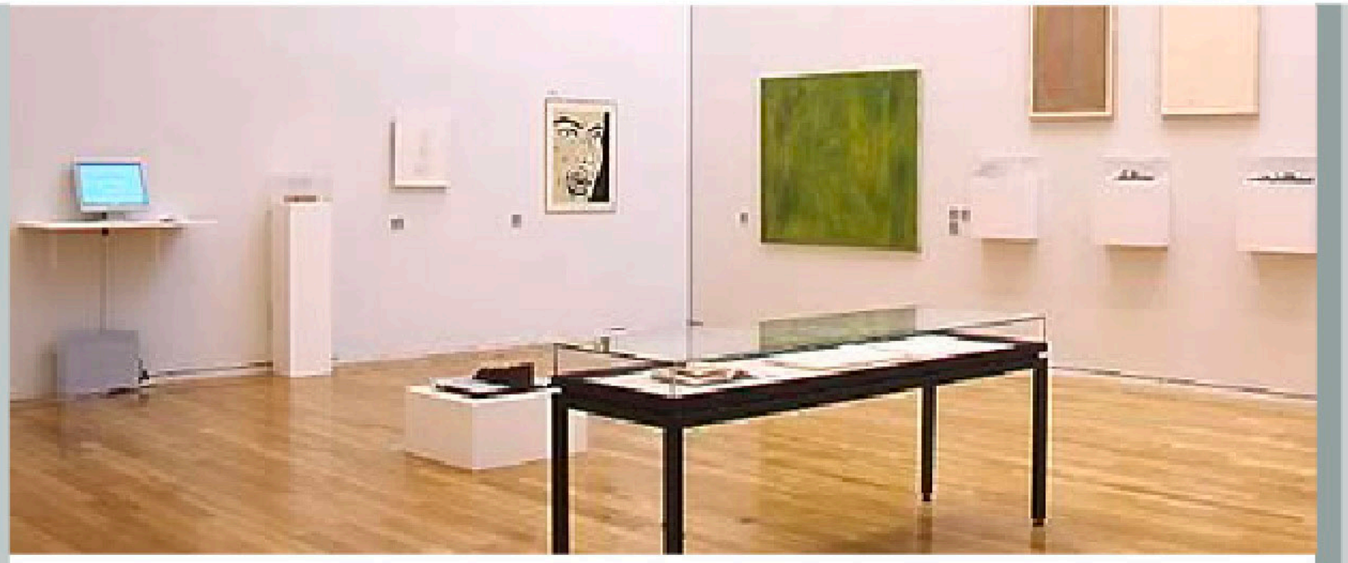


赤塚祐二《アセツキ》1981
courtesy オオタファインアーツ

日本を代表する現代彫刻家、村岡三郎と共同作業で作品を生み出してきた人物によって収集されたコレクション。企業家として独立した職業をもち、作品を生み出すのと同じスタンスで生産活動に関わるそのアプローチは、まさしく芸術行為であり、コレクションに含まれるヨーゼフ・ボイス（1921-86 / ドイツ）の名言「全ての人は芸術家である」を体現しているかのようである。共同作業者として制作現場に関わった作品、アーティストの手の動きが作品の始まりになる素描ノート、アーティストの思想の原石が顕れる初期作品、現象の始まりと終わりの「時間の隔たり」を感じさせる作品など、さまざまな『「始まり」の現場』にこだわった視点によって作品が収集されている。
コレクションには、勢いのある筆致で重厚な抽象絵画を描く赤塚祐二（1955- ）、キャンバスの上に描くのではなく、存在自体で絵画の「生」を表現しようと試みる小林正人（1957- ）、船を想起させる構造体の鉄の彫刻で、ドイツでの評価が高い原口典之（1946- ）、鉄・塩・酸素ボンベなどを用い、生命の根源と関係性を表現し続ける村岡三郎(1928-　)の作品を始め、若手では大塚泰子（1968- ）、藤澤江里子（1960- ）、前川知美（1973- ）、松本三和（1975- ）、村林基（1974- ）、渡辺英二（1961- ）などの初期作品が含まれている。

04 O.N. collection

collection▶



O.N. collection gallery view photo:Kioku Keizo

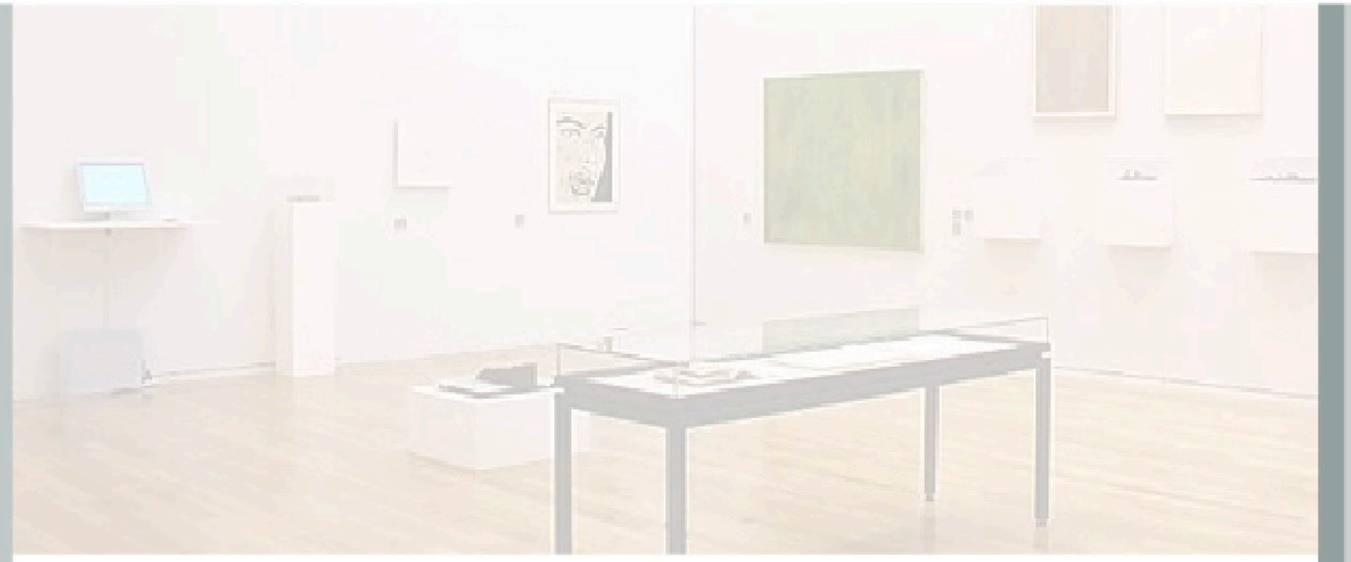
Interview

BEGINNINGS—「始まり」の現場」

コレクションのテーマのひとつは「関係性」。私は仕事でソフトウェアの会社をやっているが、村岡三郎との10年以上の対話の中で製品を作ってきている。そのテーマのベースとなっているのは「関係性」ということ。二元論を如何にして克服するか？あるいはコミュニケーションは何故成立するのか？ということだが、長年村岡さんも私も同じテーマを持っていた。村岡さんはそれをアートとして表現し、私は仕事の中で具現化してきているつもりだ。村岡さんの、熱を伝える一連の作品は、構想を何十年もあたためてできたものだ。《記憶体》というこの作品も、村岡さんとのコラボレーションにより作られた。
もうひとつのテーマは、無から有が生まれるところ、始まり、創造の原点、といったもの。若い作家を集める理由は、そこにある。最初の作品というか、きっかけになる作品というのがある。小説でいえば処女作ということになるが、作家のコンセプトが全部含まれながら、まだきれいにまとまっていなくて、非常に荒々しく表出している。そういうのがいい。だから時系列で見てゆくのが好きだ。
赤塚祐二の最初の油彩《ボート》は、もともと版画を表現手段としていた彼の最初の油彩ということで、作家本人も《ボート》で油彩の感触を掴んで、その後の油彩の仕事のきっ

04 O.N. collection

collection▶



O.N. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

赤塚祐二の最初の油彩《ボート》は、もともと版画を表現手段としていた彼の最初の油彩ということで、作家本人も《ボート》で油彩の感触を掴んで、その後の油彩の仕事のきっかけとなった作品である、と後で聞いた。
いつも現場に立ち会いたい、という気持ちがあるから、それを突き詰めてゆけば、自分がしていることはやはりアーティストとのコラボレーションということになるのだろう。
そして、原口典之。とてもいい作家だと思うが日本では無視され続けている作家のひとりではないだろうか。1986年の《イースト》というシリーズを譲ってもらったのが最初。15年位前、「ファルマコン」展に出ていた高さ6m50cmの、H鋼の作品はオイル・プールの作品とともに好きだ。

もともとミニマルなものが好きだ。特別勉強したというわけではないので、本当に素人というか、ジャンルがない。アヴァンギャルドなものが好きで、文学や音楽もそうだ。美術もその中のひとつの表現として捉えている。

テーマのきっかけとなったのは、村岡三郎の作品。極論すれば、村岡さんとの出会いがなければこの会社もなかっただろう。

04 O.N. collection

collection▶

O.N. collection gallery view photo:Kioku Keizo

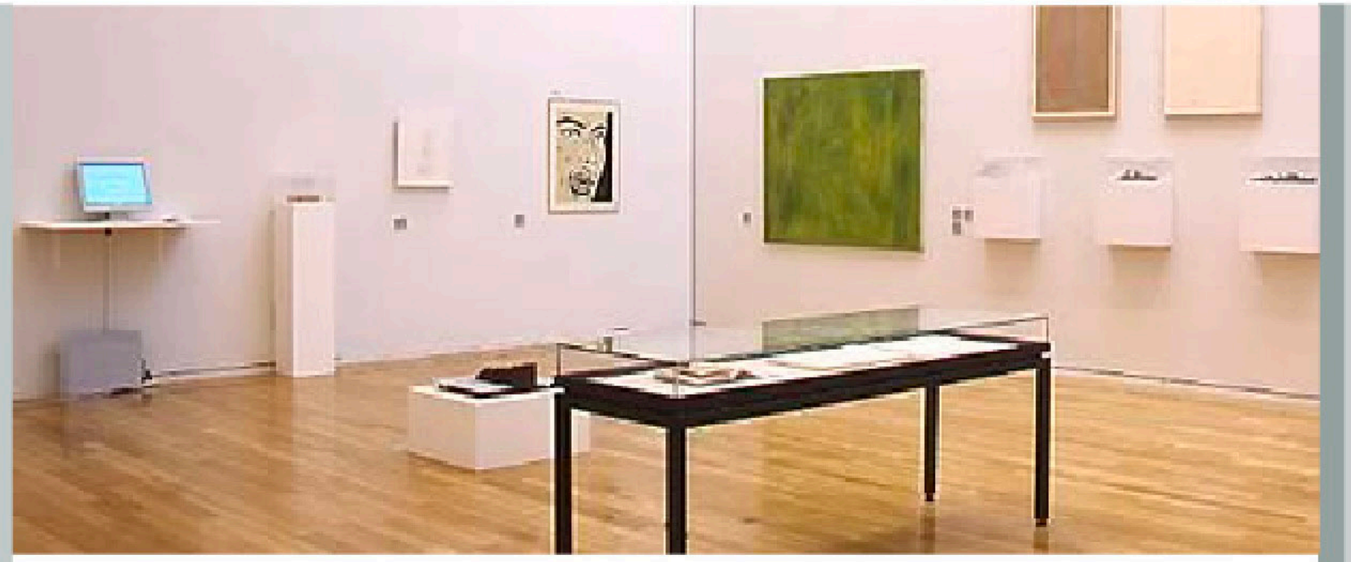
Interview

テーマのきっかけとなったのは、村岡三郎の作品。極論すれば、村岡さんとの出会いがなければこの会社もなかっただろう。
16年位前「ユーロパリア1989ジャパン」（ゲント現代美術館）で酸素ボンベの作品を10本見て以来、ずっと気になっていた。その時は若造が奇をてらって作ったものか何かだろう、と思っていたが、帰国後もずっと気になっていた。ある日、友人の友人にあたる人のマンションを訪ねた時、玄関に酸素ボンベがあった。
村岡さんという作家の作品と聞き、当時で60歳を越えていると聞き、よけいびっくりした。
村岡さんのすごいところは、60年間、作品はほとんど売れていない。それでも作り続けるというのは、「創造」に生きる姿として励まされる。皆、自分はごまかせないから、若い作家は自分でどんどんやめていってしまう。「アイアン・ベッド」は　村岡さんの戦争体験から生まれたものだが、極限まで追い詰められて、表現しなくては乗り越えて行けない、そこに作る理由がある。しかし我々以降の世代というのは、感性という意味での面白さはあるかもしれないが、作る理由が希薄なように思う。

最初のコレクションは20歳の時で、ピュッフェのポスターを六本木の画廊で買った。線と

04 O.N. collection

collection▶



O.N. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

さはあるかもしれないが、作る理由が希薄なように思う。

最初のコレクションは20歳の時で、ビュッフェのポスターを六本木の画廊で買った。線と黄色の色が気に入った。その後、自分が気になる好きな作品だけ集め続けた。創造の現場、ということで素描とか、ノートとか、作家が何気なく描いたアイディア・スケッチは気になる。その中でもボイスの黒板シリーズはずっと欲しかったもののひとつだった。

作品自体は現象であり、残りかすのようなものだと思っている。その過程の方が断然面白い。今後、面白い作家がいれば購入するかもしれないが、自分もだんだん歳をとってきているので、作家も絞られてくると思う。若い作家も見るようにしているが、どれだけ共感できるか、ということも出てきている。新しい作家と一から関係性を築いてゆくというのは時間が必要であり、なかなかできるものではない。

日本は作家にとっては、やりにくい状況だとは思う。ただ、それとは関係なしに制作を続けている作家はいるから、それで良いのではないか。
今後もコラボレーション的な「創造の共有」、「関係性」を大切にしてゆきたい。

F.T.colLection 01

S.S.+K.M. collection 02

O.S. collection 03

O.N. collection 04

▼ T.R. collection 05

courtesy:YAMAMOTO gallery　Photo:Nakagawa Masato

多重人格的コレクション ▶▶

M.H. collection 06

Ugeyan collection 07

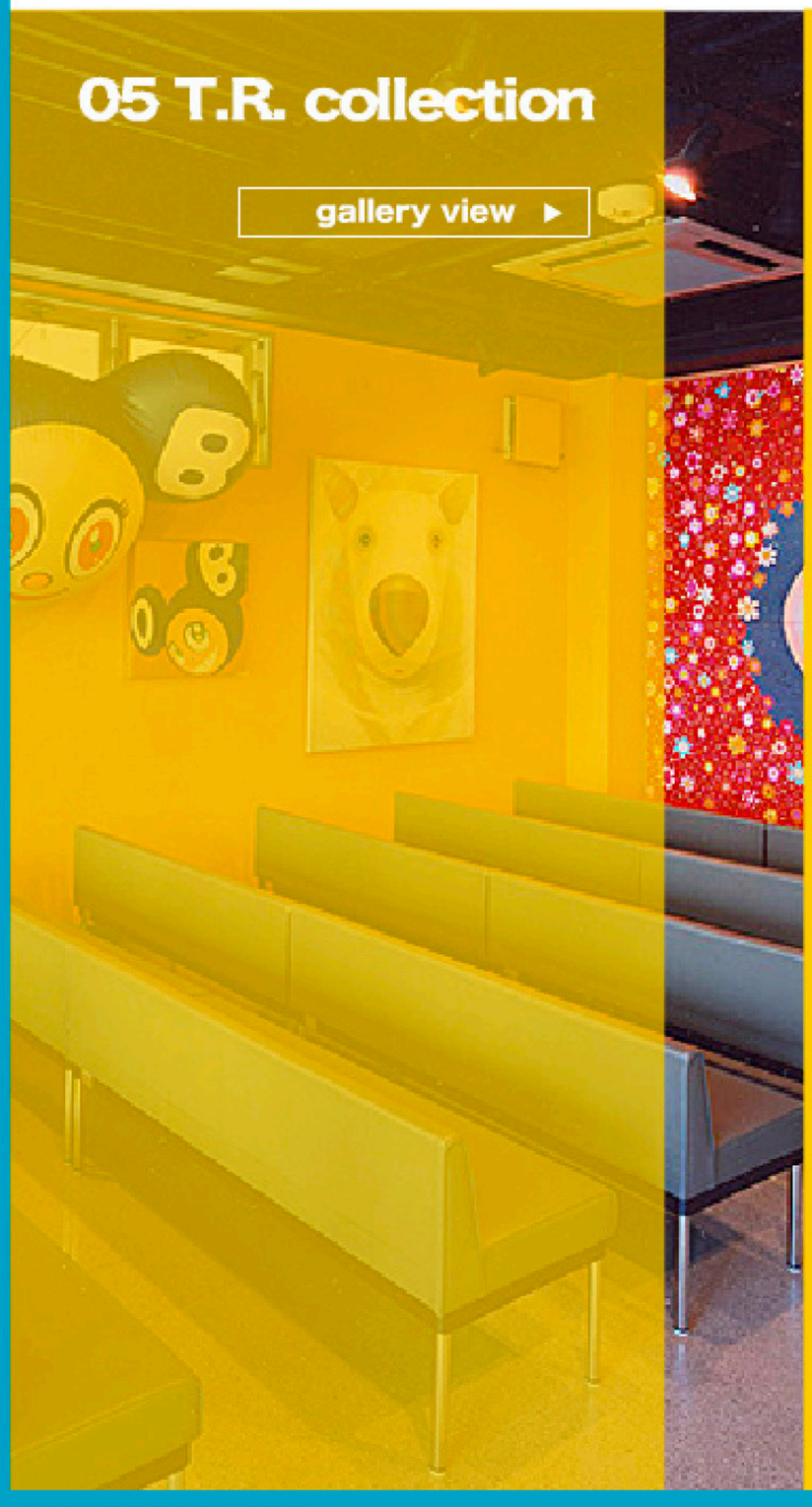
382 collection 08

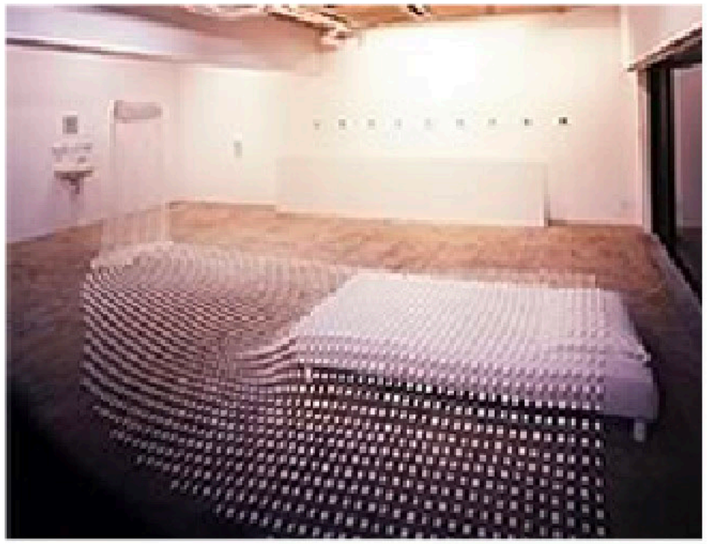
S.H. collection 09

TOC collection 10

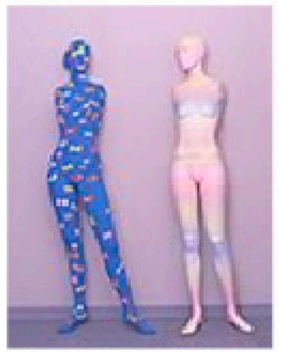
05 T.R. collection

gallery view ▶





もとみやかをる
《 個展「被膜の領域」会場風景 》1999
photo 木奥恵三
courtesy ミヅマ アートギャラリー



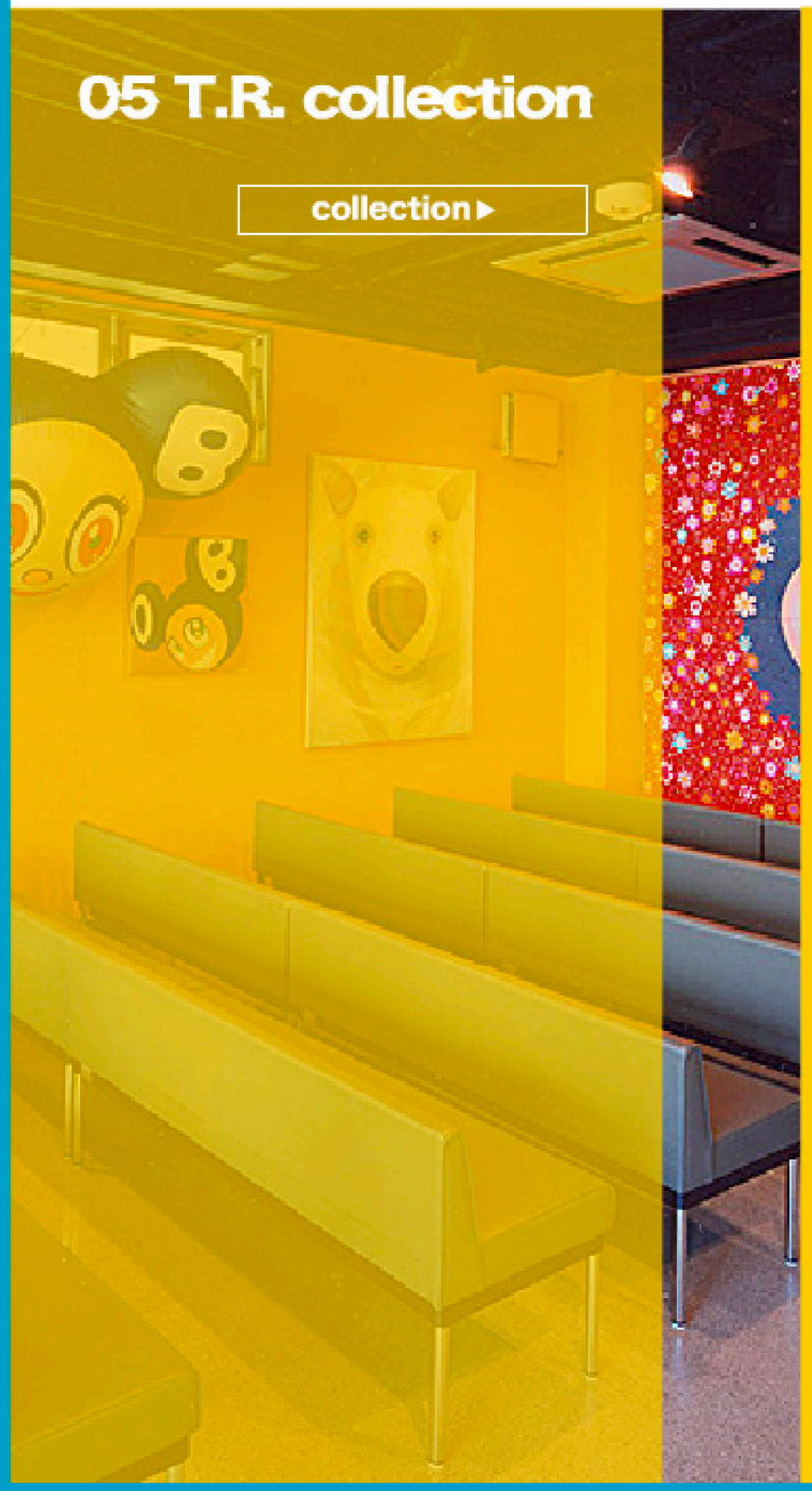
できやよい《 無題 》2000
photo 中川理仁
courtesy 山本ギャラリー

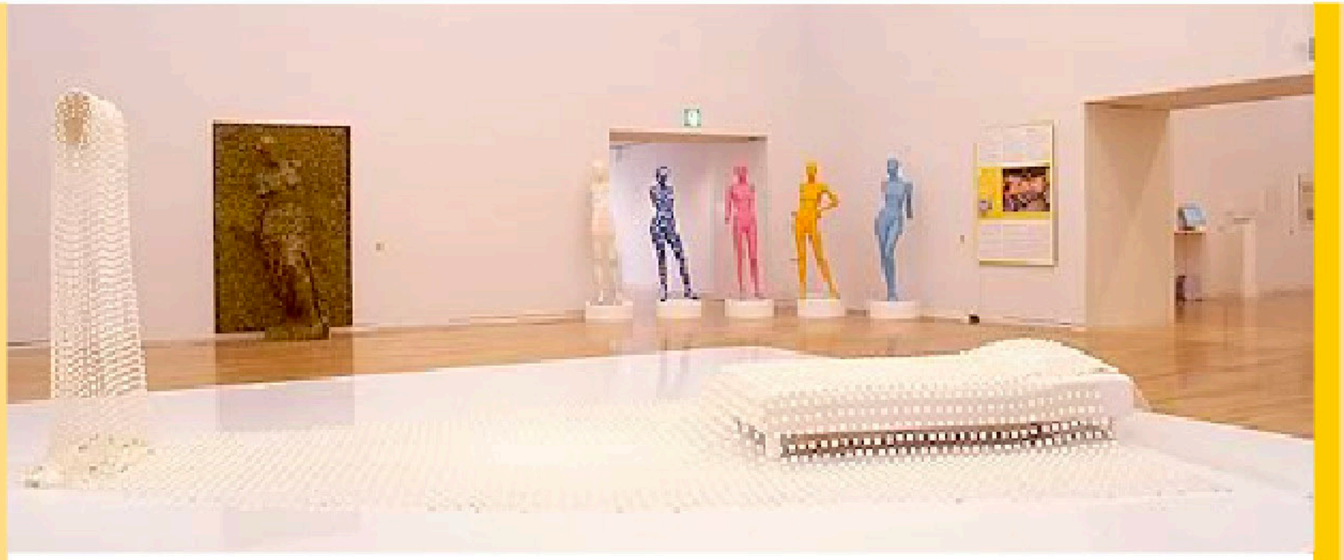
草間彌生《 Statue of Venus Obliterated by Infinity Nets 》1998
photo 上野則宏
courtesy モマ・コンテンポラリー/草間スタジオ

版画以外でも、個人が購入できる価格の作品があること知って驚いて以来、堰を切ったように収集を開始したというコレクション。「好きなものを集めているだけなので本当にバラバラで、自分のなかの多重人格的なところが出ているのかもしれない」とコレクターは語るが、現在活躍がめざましいアーティストの、その時点の作品のなかで最も良質なものを複数点ずつ収集してきた集積が、現在のコレクションを成している。そのため、国内外の美術館から展覧会のための貸出し依頼も多い。日本が抱える社会的・歴史的諸問題や、残虐かつグロテスクなテーマの絵画を卓越した日本画技法で描く会田誠（1965-　）、コレクションのきっかけとなった草間彌生のほか、蛍光色のポップな色彩で超細密画を指で描くできやよい（1977- ）、マシュマロのドレスやうさぎの着ぐるみを着たパフォーマンスなどで知られるもとみやかをる（1963-　　）、そして、現代日本と歴史上の風俗を同一画面に取り混ぜたシュールな風刺画を、伝統的な大和絵の様式で描く山口晃（1969- ）など、視覚インパクトの強い作品が多数含まれている。本展では多数の中から「女性作家の反復脅迫」をキーワードに展示。

05 T.R. collection

collection▸





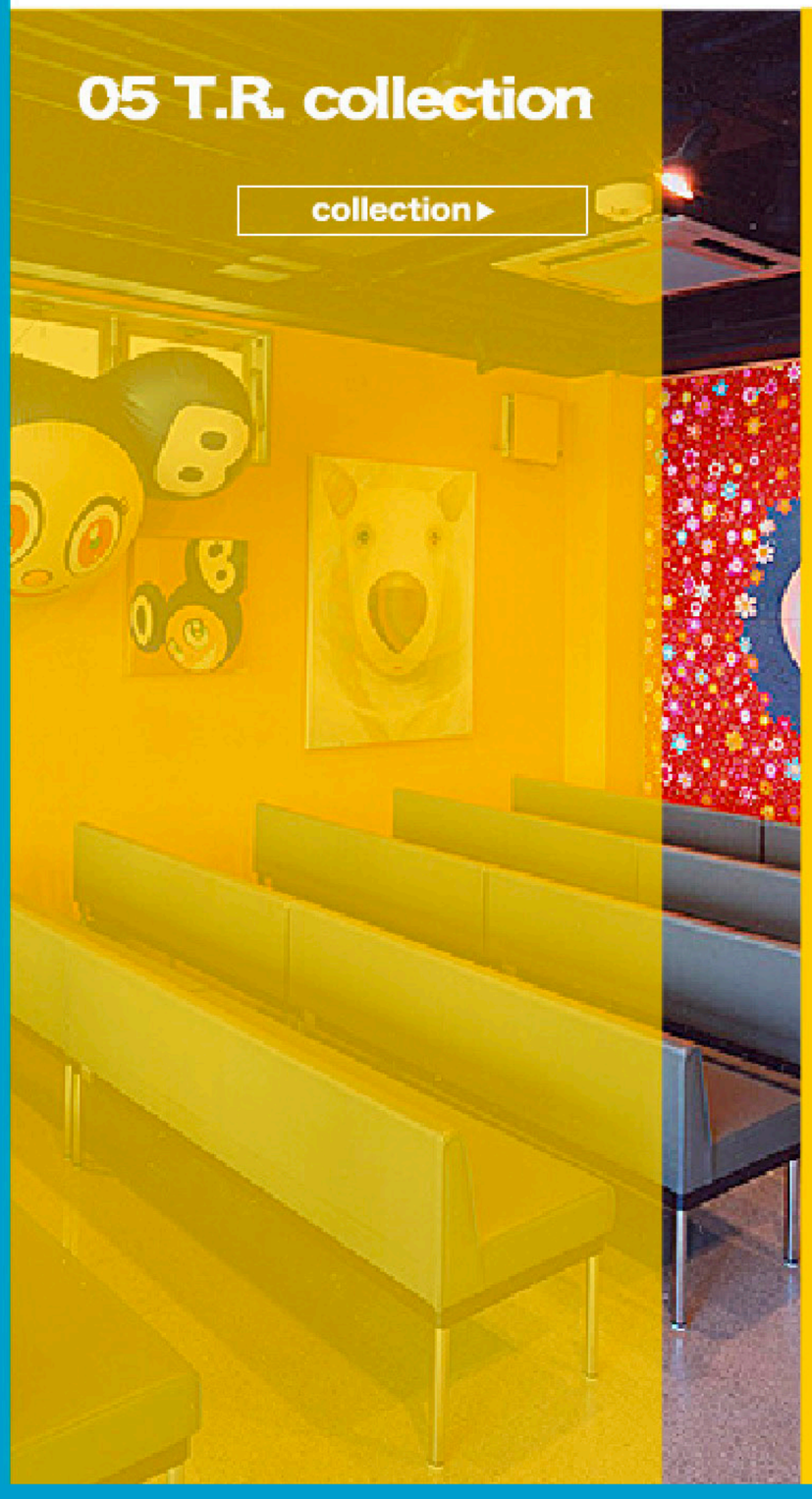
T.R. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

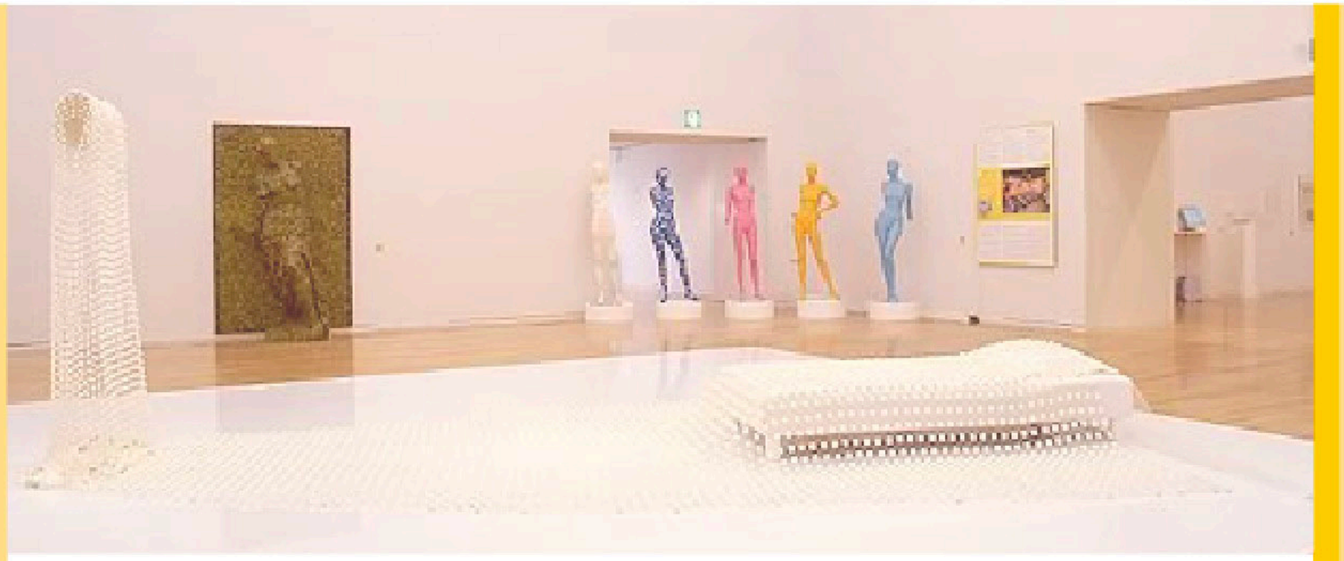
Interview

多重人格的コレクション

特別に構築する何かがある訳ではないし、多重人格的に色々なものが好き。格好よくいえば、時代のリビドーに身を委ねたままに選んでいる。自分が気に入った作家の、その時の最高の傑作と思えるものをコレクションして、その束が将来的に意味あるものになっていけば、と思っている。コレクションの中で最大の核は会田誠、山口晃、小谷元彦。今も買い続けているけど、最近は7割位が女性作家になっている。ここにある作家たちや加藤美佳、鴻池朋子、秋山さやか。今の男性作家は、わりと映像に関心が向かっていて、頭の作業みたいな感じがする。アーティストの傑出した力というのは、手の作業に表れると思うから、エネルギーのおもむくまま、といったときには、やはり手かずを使って欲しい。手かずをかけている、ということで見渡してみると、たまたまということかもしれないが、女性の方が多くなった。

「十年一日」の如く皿洗いを続けるような女性の日常については、今や呪いの声さえ聞こえる。自己実現の声に怯えて、家事や育児に身が入らないどころか、投げ出してしまう女性たちも多い。けれど、繰り返される日常の集積(アキュミュレーション)が、無益なもの





T.R. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

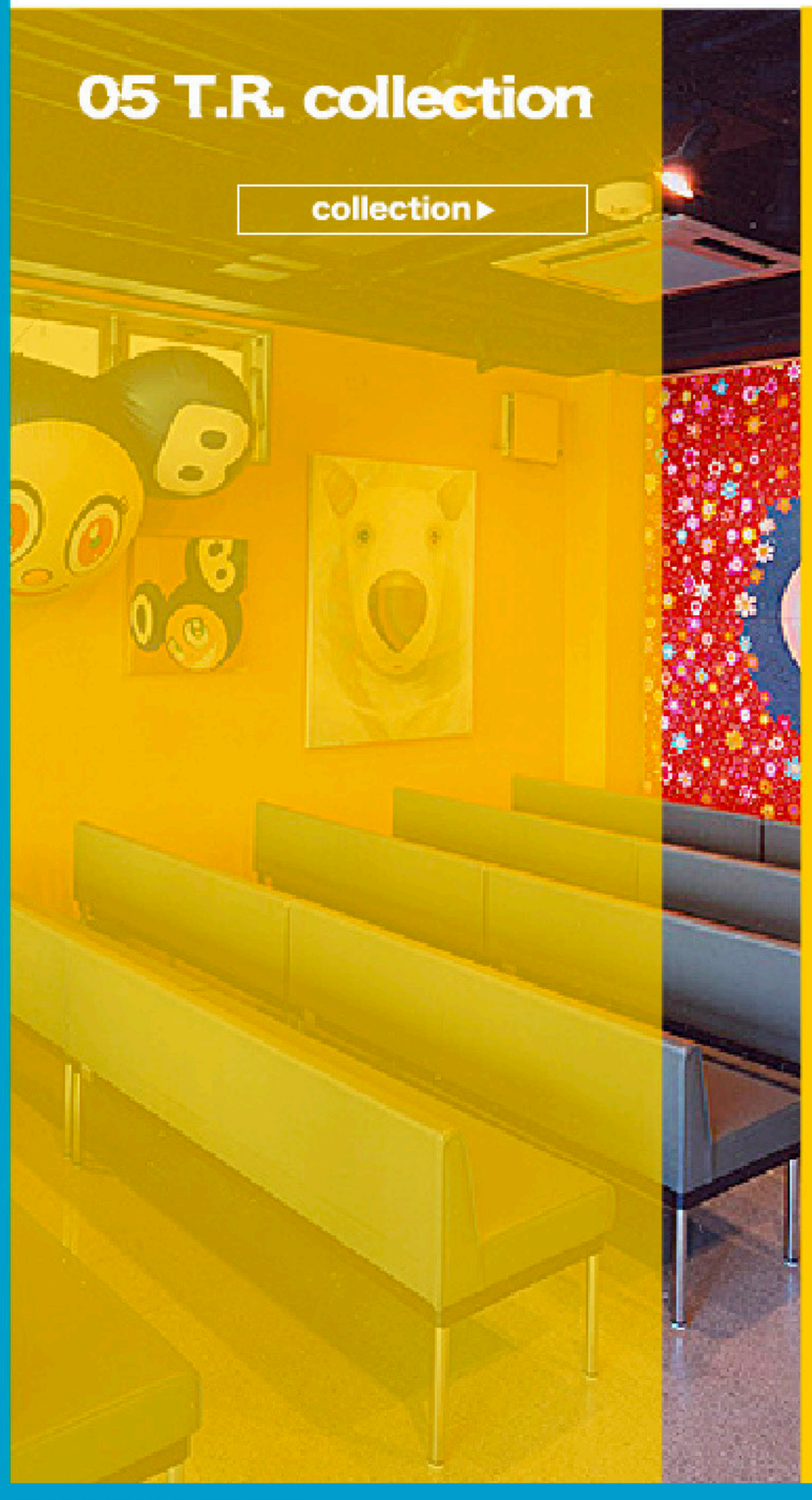
Interview

性たちも多い。けれど、繰り返される日常の集積(アキュミュレーション)が、無益なものに過ぎないと考えるのは、一方的な見方に過ぎるのではないのか。繰り返される時間は、いつか、強迫的な反復へと姿をかえる。それは、女性たちの呪いでありながら、武器ともなる。ここにたまたま、場を共有している女性作家たちの反復される強迫表出は、完全に日常を脱した異次元のものだ。

一番最初、25年くらい前に購入した作品は合田佐和子さんのもの。それからしばらくは、仕事が忙しかったり、個人的な事情があったりでコレクションをしていなかったが、15年位前、ちょうどバブルに差し掛かる頃に、学生時代シュルレアリスムに傾倒していたこともあり、エルンスト、ベルメール、デュシャンなど、ダダイストも含め、版画集を買っていた。バブルがはじけた1997年頃、草間彌生を見て、版画よりも一点しかない作品を買う方が面白いな、と思い、ちゃんとコレクションをしようという気になった。ギャラリーで個展があると聞き「もしかして、草間なんてビッグネームを買えるのかな」と思って出かけていったら、買えて驚いた。草間が久々に描いたという油彩の小さな作品、それが最初。それから堰を切ったように、コレクションし始めた。僕にとってコレクションは、小学校の切手以来のこと。あとは、澁澤龍彦や塚本邦雄の美しい特装本とか。そうしたもの

05 T.R. collection

collection▶



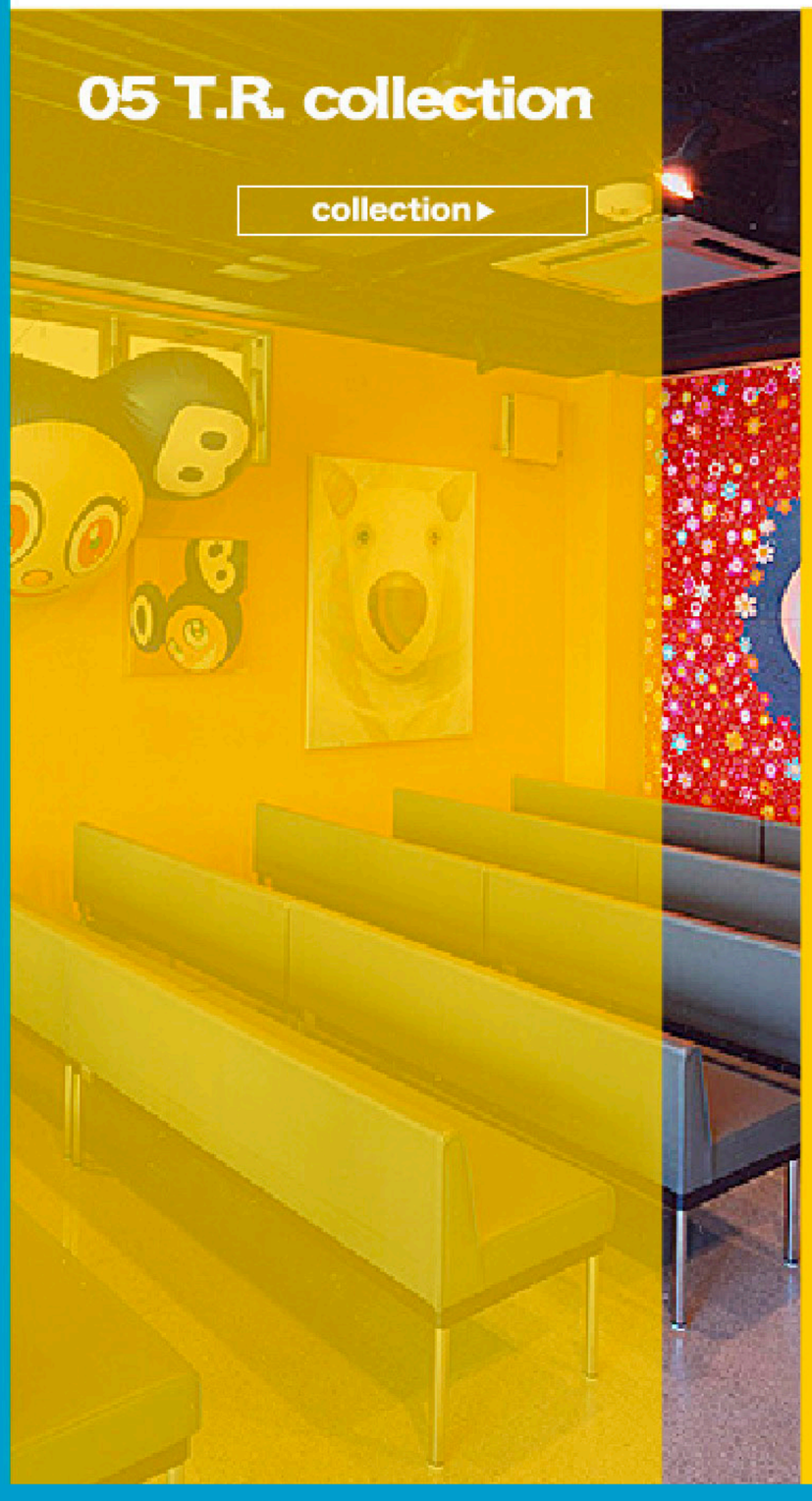
T.R. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

学校の切手以来のこと。あとは、澁澤龍彦や塚本邦雄の美しい特装本とか。そうしたものを身の周りに置いておきたい気持ちはあったので、気が付いてみたら、それが美術品ということだったのだと思う。物を集めたいという癖があって、それが切手一本一版画集と微妙に点のように集まって、オリジナルのコレクションに行き着いた、ということになる。

自分がコレクションをする、というのはある程度キャリアを積んだ作家を前にすると、何となく気恥ずかしい。コレクションを上品な行為と、僕はあまり思えないところがある。最終的に美術館をつくったりすれば、それなりの行為に仕上がるとは思うけれど、コレクション自体は「そばに置いておきたい」という、我欲みたいなことが、きっとあると思うので。コレクションを始めて7年経つ。自分の中でこれほど長く続いた趣味というのはなかったので、最終的にここに来たんだな、という感慨がある。これは一生続けてゆきたい。

将来的には、全財産を投げ打って、自分の集めたコレクションを見せる小さな美術館がつくれたら良いな、と思う。それよりどこかの美術館がコレクションを全部預かってくれて、僕が行ったときにはいつでも見せてくれる、という風にしてくれれば、すごく助かる



T.R. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

うことだったのだと思う。物を集めたいという癖があって、それが切手一本一版画集と微妙に点のように集まって、オリジナルのコレクションに行き着いた、ということになる。

自分がコレクションをする、というのはある程度キャリアを積んだ作家を前にすると、何となく気恥ずかしい。コレクションを上品な行為と、僕はあまり思えないところがある。最終的に美術館をつくったりすれば、それなりの行為に仕上がるとは思うけれど、コレクション自体は「そばに置いておきたい」という、我欲みたいなことが、きっとあると思うので。コレクションを始めて7年経つ。自分の中でこれほど長く続いた趣味というのはなかったので、最終的にここに来たんだな、という感慨がある。これは一生続けてゆきたい。

将来的には、全財産を投げ打って、自分の集めたコレクションを見せる小さな美術館がつくれたら良いな、と思う。それよりどこかの美術館がコレクションを全部預かってくれて、僕が行ったときにはいつでも見せてくれる、という風にしてくれれば、すごく助かるけれど。海外では、美術館がコレクターの作品を管理して、双方が利用しあうというのは、普通のことだから、そんなことを皆、これから模索していけたら良いと考えている。

F.T.colLection 01
S.S.+K.M. collection 02
O.S. collection 03
O.N. collection 04
T.R. collection 05
▼ M.H. collection 06
人と時代のエネルギーが運び込むもの ▶▶

photo:Hayakawa Koichi

Ugeyan collection 07
382 collection 08
S.H. collection 09
TOC collection 10

06 M.H. collection

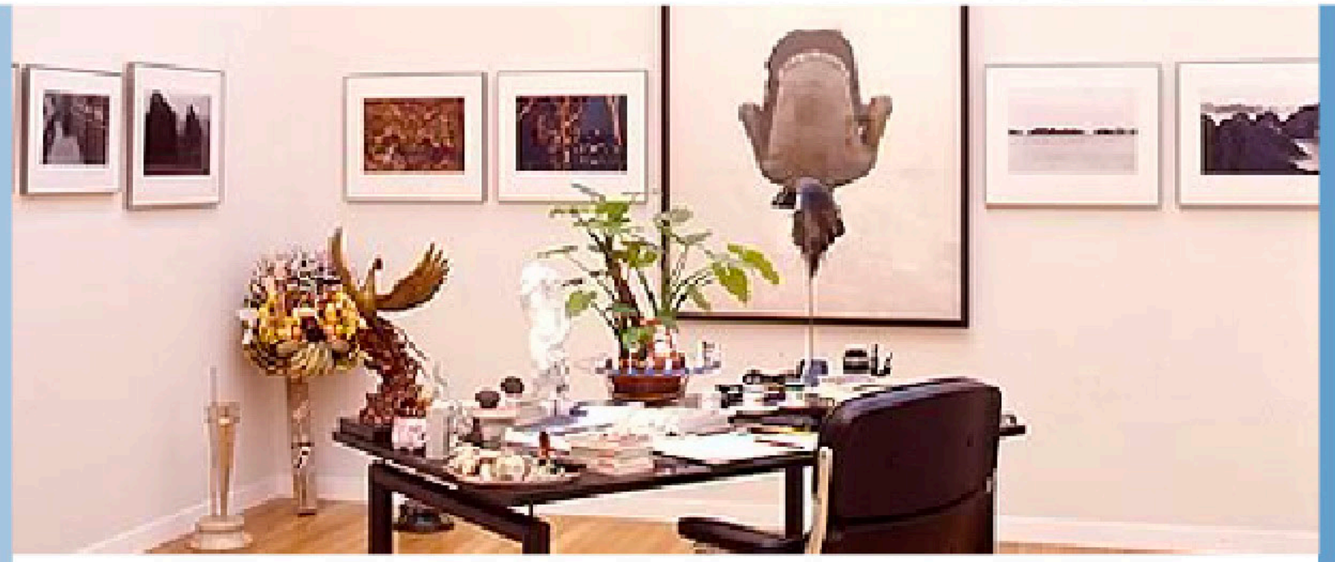
gallery view ▶

ジョルジュ・ルバープ
《ポール・ポワレの作品》1911
photo 早川宏一

肩書きや職業名の枠にとらわれないこの人物は、知り合った多くのクリエイティブな人々から、近所の子供やおばあちゃんまで、とにかく人との交流を大事にしている。その交流の賜物（？）なのか、数々の作品や本、不思議で貴重な数々のオブジェが自然と事務所に流れ着き、「コレクション」と呼ばれるようになったという。撮影の仕事で小道具として使用したオブジェやリモージュの貴重な陶器なども多い。
なかにはチャップマン・ブラザーズの立体やジョナサン・ボロフスキーの版画、金子國義が版画を手がけた『不思議の国のアリス』の特装本、アンティークのティーセット、ロトチェンコのオリジナル・プリント、バカラのドラえもんなど種種多様なものが含まれている。本人はコレクターという意識はほとんど持っていないものの、現代のコレクションのあり方として、その作品に対するユニークな姿勢は一見の価値あり。

06 M.H. collection

collection▸



M.H. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

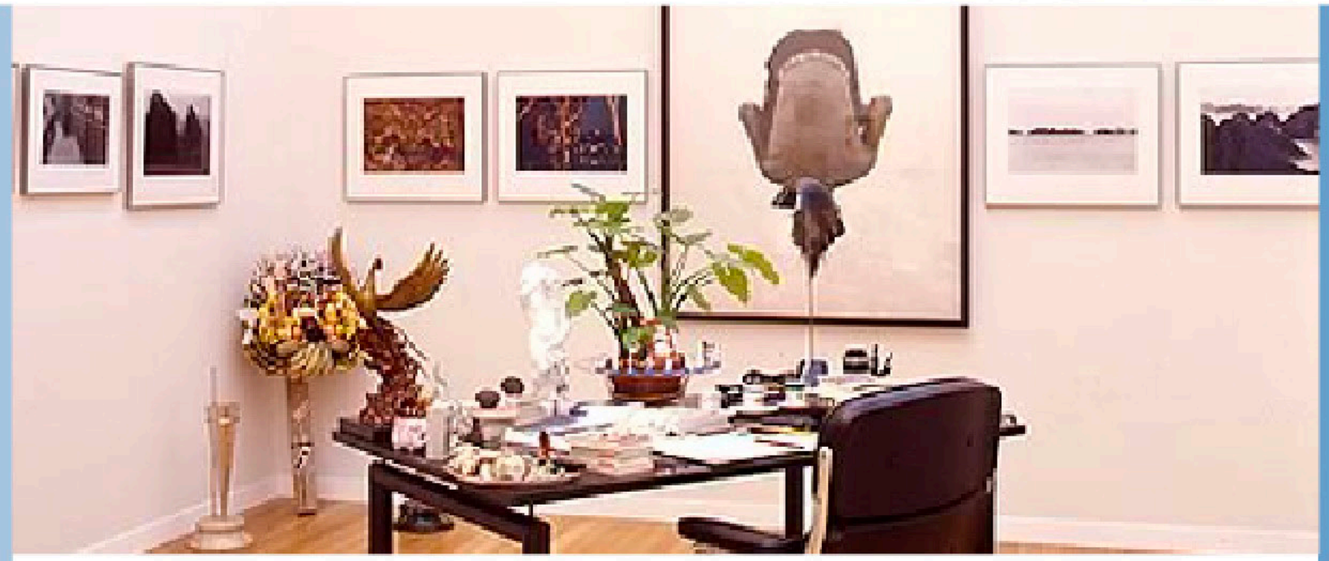
人と時代のエネルギーが運び込むもの

僕は北海道の漁村育ちで、実家が水産加工業をしていた。裏には牧場があって、石ころや流木が大好きで、小さい海老やら何やら、集めて並べたりした。モノ集めの原体験は、それだったのかもしれない。「何になりたい」ということはあまり思わないまま、出会った仕事に興味を持ってやってきた。その中で人との出会いがあり、自然とこういうもの（作品）が集まってきた、という感じ。二十数年前にカタカナ職業時代、というのがあったでしょう。コピーライター、スタイリスト、カメラマン、といったように業種を固定することで、ひとつのステイタスみたいな時代があったが、そういう時代に僕はひとつを選ばなかった。だからこそ、いろんなジャンルの人と関わることができたのだと思う。画家、彫刻家、家具職人、染色家など、いいなあ、会いたいなあ、と思っている人と、偶然一緒に仕事ができたりした。今はTV広告という15秒から30秒のメディアの中で、時代性をプラスした映像表現のために立体物を作っている。

この部屋ではしょっちゅうパーティーを開く。18歳の子供から、70歳のおばちゃんまで、多い時で150人くらい集まる。全部自分で料理を作って。そういう人たちが集まるこ

06 M.H. collection

collection▸

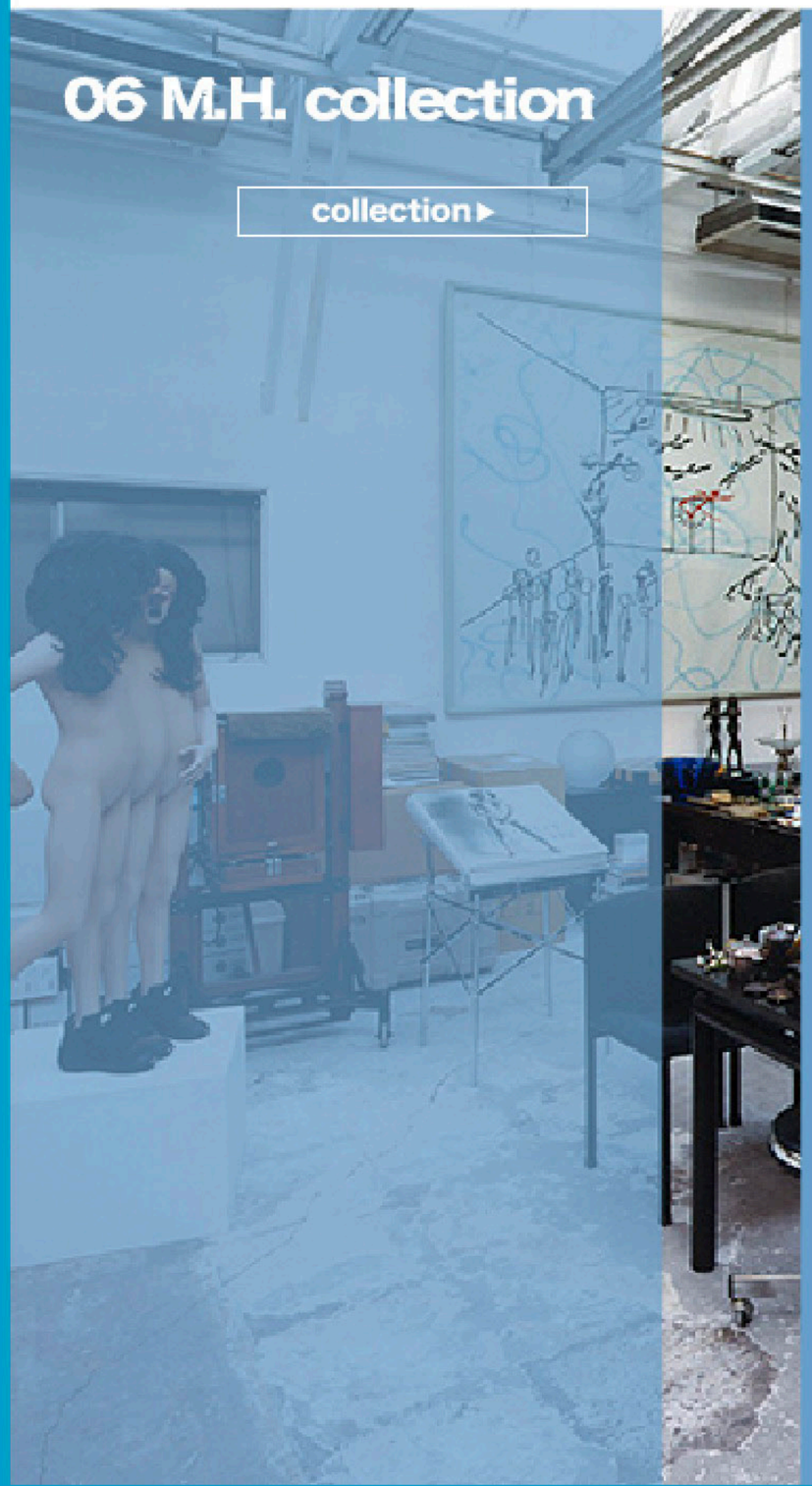


M.H. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

この部屋ではしょっちゅうパーティーを開く。18歳の子供から、70歳のおばちゃんまで、多い時で150人くらい集まる。全部自分で料理を作って。そういう人たちが集まることで良い「気」が集まる。仕事でやってると、仕事のエネルギーでしかないが、そうでない雑多なところで話をしていくと、自分と違う分野の中に、すごい人が山ほどいる。コレクションの始まりは、身近なものでいうと、器やグラスからかな。単純に好きで手に入りやすいもの。このバカラのドラえもんもそう。うれしく思ったり、置いておいて気にならない、かわいい、話題性があるもの。それがあることで気持ちがリラックスできるとか、癒されていくとか。コレクションしているというよりは、自分が表現しているから人のものも見てみたいとか、写真で置いておくよりは、本物を置いておきたいということに近いだろうか。要するに自分が発信しているからこそ、ものからもエネルギーをもらいたい、ということだと思う。だからといって、それに執着するわけではなく、欲しいという人がいたら、あげたりもする。

集まるのは時代の前を行くものが多いと思う。アンティークといってもそれが作られた時代には最先端だし、ここにあるプラスティックの鏡受けも、プラスティックができた頃のものだったりする。そういうエネルギーをもらっている。知り合いがプレゼントしてくれ



06 M.H. collection

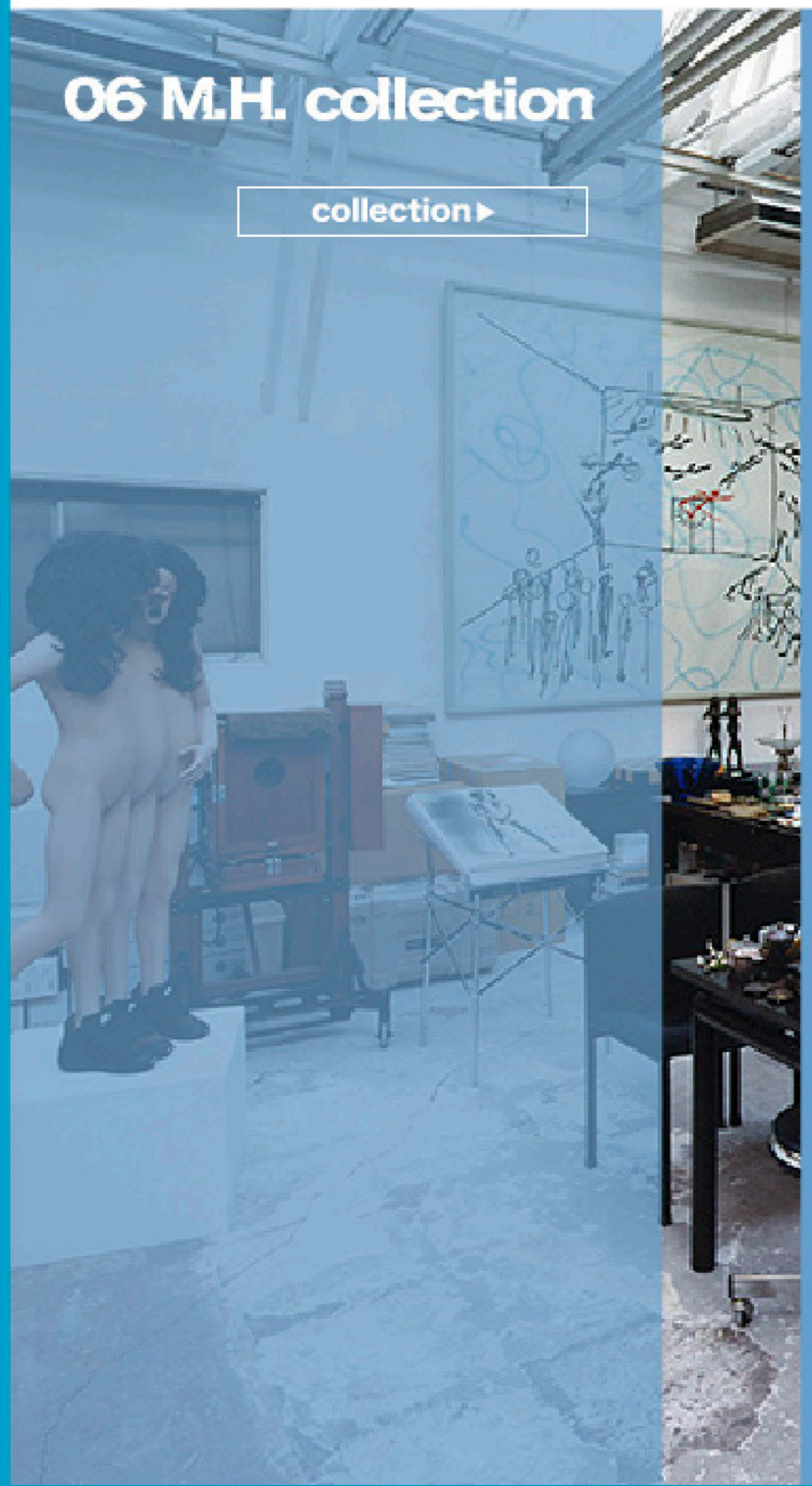
collection▸

M.H. collection gallery view photo:Kioku Keizo

Interview

ものだったりする。そういうエネルギーをもらっている。知り合いがプレゼントしてくれたり、お土産にくれたり、というものも沢山ある。たとえばこの食塩入れは、ある人がMoMA（ニューヨーク近代美術館）で買ってきたものだけど、ここに置いておいた方が似合う、ということでやってきた。それぞれの思いがあって、それぞれのエネルギーがこもった、大切なものだ。こういう仕事をしていると、セットを作る時の小道具が必要になる。そういうものを探していて、ある時アンティークを輸入販売する会社の社長に出会った。彼が何度も来るうち、この部屋に置いた方がいいんじゃないか、ということになり、ガレの壷だとか、ラリックとか、バカラのロックグラスなんかが箱に入って送られて来た。そんなふうに、僕は結果として周囲からコレクターにされている。嫌いじゃないから、結果、エネルギーとしてそれを受ける。

ポール・ポワレのことは、最初知らなかった。ただ画集を開いた時、自由でほのぼのとした「気」が流れた。画集の間には古いフランス語の手紙も挟まっていた。僕の全然知らないところでいろんな人が関わって、最後に僕のところにやってきた。ポワレやこの画集に携わった人たちのエネルギーが、何か相乗して伝わってくるんだ。ロトチェンコのプリントが僕のところに来たのは、今から15年前。知り合いの美術商が勝手に置いて行った



06 M.H. collection

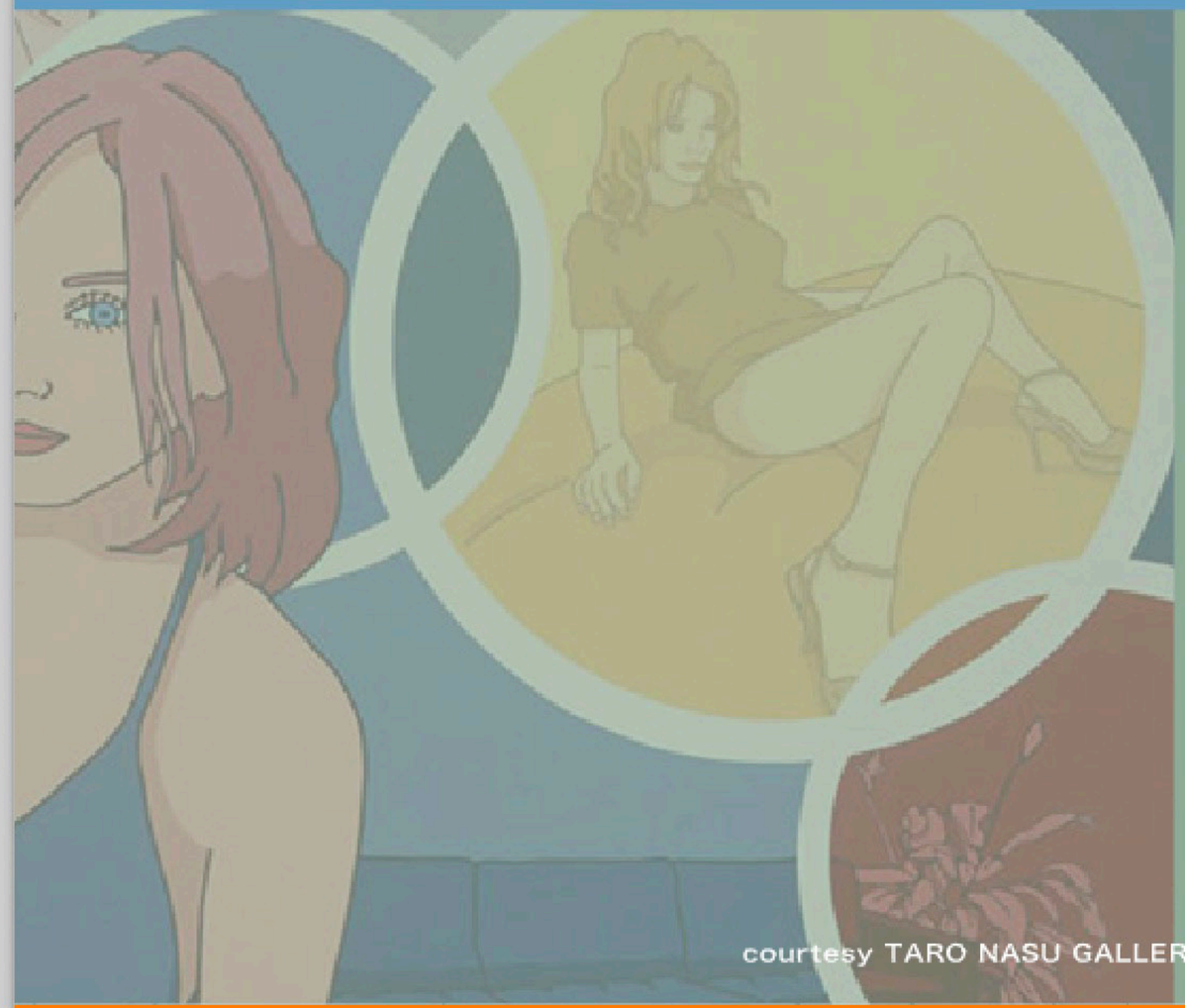
collection▸

M.H. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

に携わった人たちのエネルギーが、何か相乗して伝わってくるんだ。ロトチェンコのプリントが僕のところに来たのは、今から15年前。知り合いの美術商が勝手に置いて行ったものだ。美術商いわく「ビンテージもので、また手に入るかどうか……とにかく置いて行きます」と。僕にとっては美術品としての価値はどうでもよくて、それが良いか悪いか、好きか嫌いかでしかない。これは一目ぼれだった。リモージュの陶器は、スタンドなど一連のものが気に入って飾っていたら、知らぬ間に集まってきた。お土産でもらったものや、古いものや新しいものがゴチャゴチャ。これだけ集まると見ていても楽しい。ほら、ボックスの留め金がすごく凝っていたりする。気持ちの良いものに囲まれていると、居心地の良いエネルギーが充満してくる。そのせいなのかな、僕の事務所に来る人は皆、長居をする。

ものは増えていく一方だが、人にあげたりもしている。それぞれの時代に生きる人たちの生き方そのものがアートで、全ての人がアーティストだ。みんな工夫があるし、みんなクリエイティブだ。その中で僕が出会ったものとか、できたことというのは、すべてチャンスによるものだった。出会いのチャンスの時には、やっぱり自分の心を解き放たないと、相手もうまく入ってこない。アートとの出会いもそれと似てるんじゃないかな。



courtesy TARO NASU GALLERY

共鳴し合う古典と現代 ▶▶

「伊年」印
《 山道図屏風 》江戸前期(参考作品)
photo 早川宏一

長谷川純《 And , Now You Are 》
2001
courtesy TARO NASU GALLERY

美術館職員であるこのコレクターは、研究のかたわら、日本の古美術を収集していた。コレクション名の「うげやん」は、江戸琳派の画家酒井抱一が隠棲し、書画・俳諧などの風流三昧の生活を送った下谷根岸の閑居・雨華庵（うげあん）を大阪弁風にもじったもの。もともとコレクション癖はあったらしく、職場の本棚の一段はさまざまなキティーちゃんグッズであふれ、また、自宅にはカップヌードルの容器のコレクションもある。
美術館が収蔵する古美術の展示方法を考えるなかで、東京の画廊に勤める親しい友人らの協力を得て、現代美術とのコラボレーション展という企画に発展させたが、これが現代美術コレクションのきっかけともなった。ヤノベケンジ（1965- ）の金と銀の市松模様のチェス盤をコレクションしていたところ、背景に同じような金銀箔の市松模様をあしらった江戸時代初期の作者不詳の《葛屋図屏風》（六曲一隻）を見つけて購入するなど、古美術と現代美術のコレクションが同一の視線のもとでバランスよく共鳴し合っているのが

「伊年」印
《 山道図屏風 》江戸前期(参考作品)
photo 早川宏一

長谷川純《 And , Now You Are 》
2001
courtesy TARO NASU GALLERY

もともとコレクション癖はあったらしく、職場の本棚の一段はさまざまなキティーちゃんグッズであふれ、また、自宅にはカップヌードルの容器のコレクションもある。
美術館が収蔵する古美術の展示方法を考えるなかで、東京の画廊に勤める親しい友人らの協力を得て、現代美術とのコラボレーション展という企画に発展させたが、これが現代美術コレクションのきっかけともなった。ヤノベケンジ（1965- ）の金と銀の市松模様のチェス盤をコレクションしていたところ、背景に同じような金銀箔の市松模様をあしらった江戸時代初期の作者不詳の《葛屋図屏風》（六曲一隻）を見つけて購入するなど、古美術と現代美術のコレクションが同一の視線のもとでバランスよく共鳴し合っているのが特徴的。ほかには卓越した木彫の技巧で精緻に草花を再現する須田悦弘（1969- ）、ロンドン在住の長谷川純（1969- ）の大作や、切り紙のコラージュによるクールな作風で知られるデイヴィッド・ソープ（1972- ）、ポール・モリソン（1966- ）など。

Ugeyan collection gallery view　　photo:Kioku Keizo

Interview

共鳴しあう古典と現代

私は学芸員として江戸時代の画家・酒井抱一を中心に琳派を研究テーマにしている。研究資料というつもりもあって、現代のグラフィックデザインやアニメにも通じる面白さがある琳派の作品を、何点か持っていた。現代美術についてはほとんど知らなかったし、何をどう見るかという基準も全く自分の中にない状態だったが、ある時、古美術の展示を通じて、現在作品を作っている人たちと古美術との関わりを強めることができないかと考え、知人に紹介してもらってギャラリーを見て回ることになった。4～5年前のことだ。あくまでも仕事の勉強のために見に行ったのだが、そこでまず買ったのが安田千絵の写真だった。私自身、ものづくりが好きで、油彩画もやったことがあるし（小学校のお絵かき教室程度だが）、高校くらいからは写真を趣味として今でも続いている。もちろん撮るだけでなく見るのも好きで、古美術以外ではよく見てきた分野だと思う。その時、パッと目に付いたのが安田さんの植物園を撮った作品だった。テーマや構成（視線の位置）とか、プリントの調子とか、額装とか、自分にとって何より共感できる作品で、これを部屋に飾ったらほんとに素敵だろうと思って買った。コレクションというのじゃなく、自分の生活のなかにあるものとして、今でも一番好きな作品だと思う。

07 Ugeyan collection

collection▶

Ugeyan collection gallery view　　photo:Kioku Keizo

Interview

活のなかにあるものとして、今でも一番好きな作品だと思う。

「コレクション」という意味で本当にきっかけとなったのは、長谷川純だ。長谷川さんの2回目の個展で《And, Now You Are》がギャラリーの正面にあって、「かっこいい！どうしても欲しい！」と強く思った。色や線が美しく、対象を形として捉える力がある。琳派に通ずるところがあるかもしれない。買うときには「6畳間の壁いっぱいに掛ければ大丈夫だろう」くらいしか考えず、壁の寸法を測る前にもう決めてしまっていた。結局収まらなかったが。コレクションのテーマは特にないが、強いて言えばかわいいものが好きだ。動物の作品も結構ある。自分だけでなく人を楽しませてくれるものが、古美術も含めて好きなので、それはスタイルであったりデザインであったりもするのだが、動物というテーマはなかでも一番入りやすいところなのだと思う。ただ、自分がかわいいもの好きでもあることはコレクションのなかで気づいたことだ。自分の好きなものが具体的に目の前に集まってきていて、逆にそれらが自分がどういう人間であるのかを教えてくれるということなのだろう。仕事で美術作品と関わっているせいか、それを自分の生活のなかに持ち込むのは面倒くさく、以前は無味乾燥な部屋のなかで過ごしていた。でも、コレクションを始めて、自分の為に作品を選んだり飾ったりするのは、全く別の楽しみであることに気がつ

Ugeyan collection gallery view　　photo:Kioku Keizo

Interview

めて、自分の為に作品を選んだり飾ったりするのは、全く別の楽しみであることに気がついた。自分が楽しめばいいのだから。作品選定とか展示構成に理屈は必要ないし、キャプションもつけなくていいしね。ほかに収集しているのはキティちゃんとカップヌードルのコレクション。カップヌードルのデザインは以前から気になっていたのだが、十数年前、関西空港ができたときに、空港に乗り入れる飛行機の尾翼の部分をあしらった９社のデザイン付きのカップが出回ったのを駅前のスーパーで一通り集められたのがきっかけで、それ以降は少しでもデザインに変化があれば買うようにしていたが、巷でスケルトンが流行ったときにカップヌードルでも限定版で出たのを入手できなかったことから、今はとりあえず中止している。キティちゃんについては、ある年のクリスマス、デパートにトナカイの格好をしたキティちゃんがいて、これはかわいいな、と思った。ぬいぐるみが着ぐるみを着ている、その発想が面白いと思ったし、とにかく可愛らしかったので、思わず買って帰った。職場に置いておくと、皆が旅行先で見つけたキティちゃんを買ってきたりして、少しずつ増えていった。本棚の一部をそれ専用で使ったりして、いつの頃からか「キティ神棚」と呼ばれるようになった。これは自分一人で集めたものではなく皆のコレクションだと思うから、思い入れが深い。他に、1987年から5年間くらい、女性歌謡ポップスのテレビ映像をコレクションしたものがある。拾った石も集めている。以前あっ

Ugeyan collection gallery view　　photo:Kioku Keizo

Interview

ぐるみを着ている、その発想が面白いと思ったし、とにかく可愛らしかったので、思わず買って帰った。職場に置いておくと、皆が旅行先で見つけたキティちゃんを買ってきたりして、少しずつ増えていった。本棚の一部をそれ専用で使ったりして、いつの頃からか「キティ神棚」と呼ばれるようになった。これは自分一人で集めたものではなく皆のコレクションだと思うから、思い入れが深い。他に、1987年から5年間くらい、女性歌謡ポップスのテレビ映像をコレクションしたものがある。拾った石も集めている。以前あった段ボール箱２つ分の石は引っ越しの際に捨てられてしまった。今は趣味で山に登ったときに山の形をした石を拾ってきて悦（ルビ：よろこ）んでいる。つげ義春の「無能の人」にも石を拾う人々が出てくるが、江戸時代初期に金閣寺の住持であった鳳林承章の日記「隔冥記」にも石を拾う話がよく出てくる。今も昔も変わらない。今後、琳派はかなり意識的に買うだろうけれども、コレクションを作り上げることは意識していない。自分で楽しんで集めて、その結果どうなってゆくかによる。現代美術の作家たちと付き合って気づいたのは、彼らにはそもそも古美術とか現代美術とかいう境界がないということ。ただ、活動範囲としてどうしても「古美術」の割合は少ないようだ。自分自身古美術の研究者であることを離れて、アーティストの方々と古いものから新しいものまでいろいろ見て回って、いろいろ言い合えるような機会があったらいいなあと思っている。

F.T.colLection 01

S.S.+K.M. collection 02

O.S. collection 03

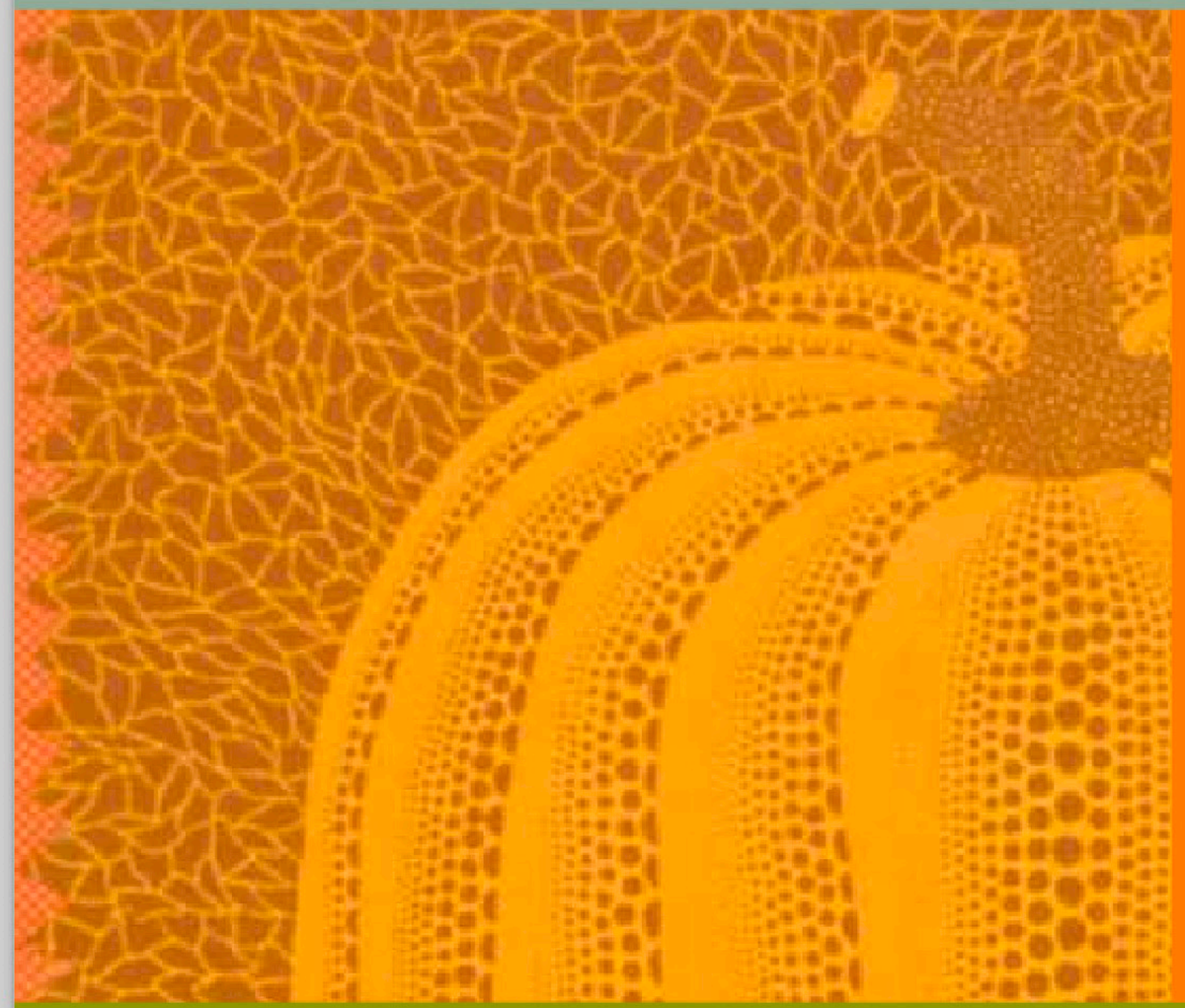
O.N. collection 04

T.R. collection 05

M.H. collection 06

Ugeyan collection 07

▼ 382 collection 08



アートと共に生きる — ドリーム・ハウス ▶▶

S.H. collection 09

TOC collection 10

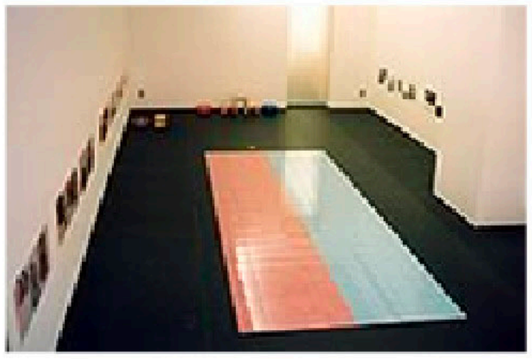
ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY

アートがあれば　WHY NOT LIVE FOR ART?

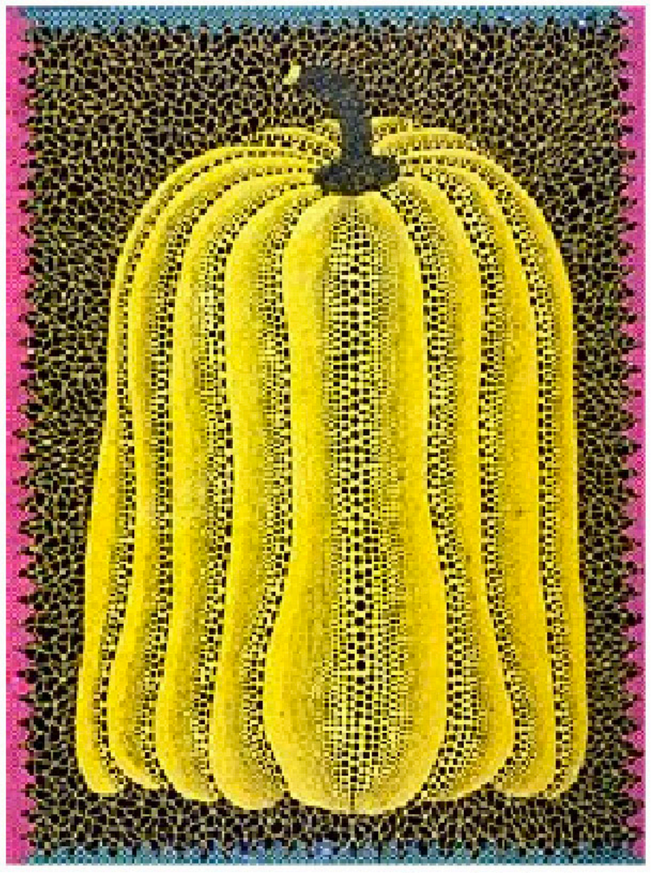
other collections

08 382 collection

gallery view ▶



ドミニク・ゴンザレス＝フォルステル
《 フィーユ/ギャルソン 》1995
photo 木全朋子 courtesy ギャラリー小柳



草間彌生《 南瓜 》1981
courtesy オオタファインアーツ

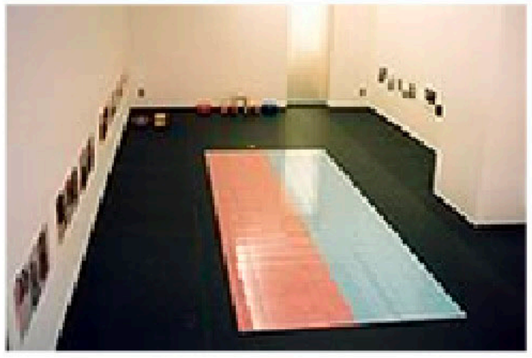
コレクター自身と同世代で、時代の感覚を共有できる国内外のアーティストの作品を中心に収集しているコレクション。なかでも特に、日本や東京をテーマにした作品に目が向けられている。現代アートのなかで最初に購入した草間彌生については、50〜90各年代の重要作品が所蔵されている。単に作品を収集するだけではなく、アーティストと交流を深め、アーティストと共に「アート＝ライフ」の生活を送るなかで形成されたコレクション。個人の記憶や物語をイメージさせるインスタレーションや映像作品を制作し、国際的にも評価が高いドミニク・ゴンザレス＝フォルステル（1965- / フランス）や、ある目的を設定し、その過程で出会う人や動物とのコミュニケーションを作品化する島袋道浩（1969- ）らとの出会いが鍵となり、12名のアーティストへのコミッション・ワークによる自宅を建てるに至る。まさにアートのなかで暮らす「ドリーム・ハウス」は、プランから4年目を迎え、奈良美智の襖絵、草間彌生の姿見など、

アートがあれば　WHY NOT LIVE FOR ART?

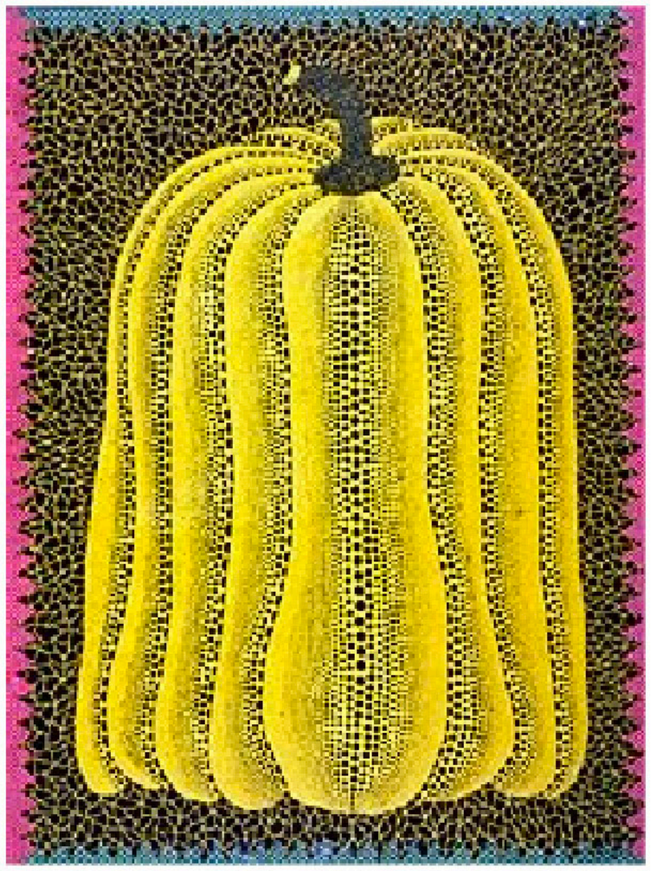
other collections

08 382 collection

gallery view ▶



ドミニク・ゴンザレス＝フォルステル
《 フィーユ/ギャルソン 》1995
photo 木全朋子 courtesy ギャラリー小柳



草間彌生《 南瓜 》1981
courtesy オオタファインアーツ

心に収集しているコレクション。なかでも特に、日本や東京をテーマにした作品に目が向けられている。現代アートのなかで最初に購入した草間彌生については、50〜90各年代の重要作品が所蔵されている。単に作品を収集するだけではなく、アーティストと交流を深め、アーティストと共に「アート＝ライフ」の生活を送るなかで形成されたコレクション。個人の記憶や物語をイメージさせるインスタレーションや映像作品を制作し、国際的にも評価が高いドミニク・ゴンザレス＝フォルステル（1965- / フランス）や、ある目的を設定し、その過程で出会う人や動物とのコミュニケーションを作品化する島袋道浩（1969- ）らとの出会いが鍵となり、12名のアーティストへのコミッション・ワークによる自宅を建てるに至る。まさにアートのなかで暮らす「ドリーム・ハウス」は、プランから4年目を迎え、奈良美智の襖絵、草間彌生の姿見など、数箇所を残し、完成を目前に控えている。

08 382 collection

collection▶

382 collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

アートと共に生きる―ドリーム・ハウス

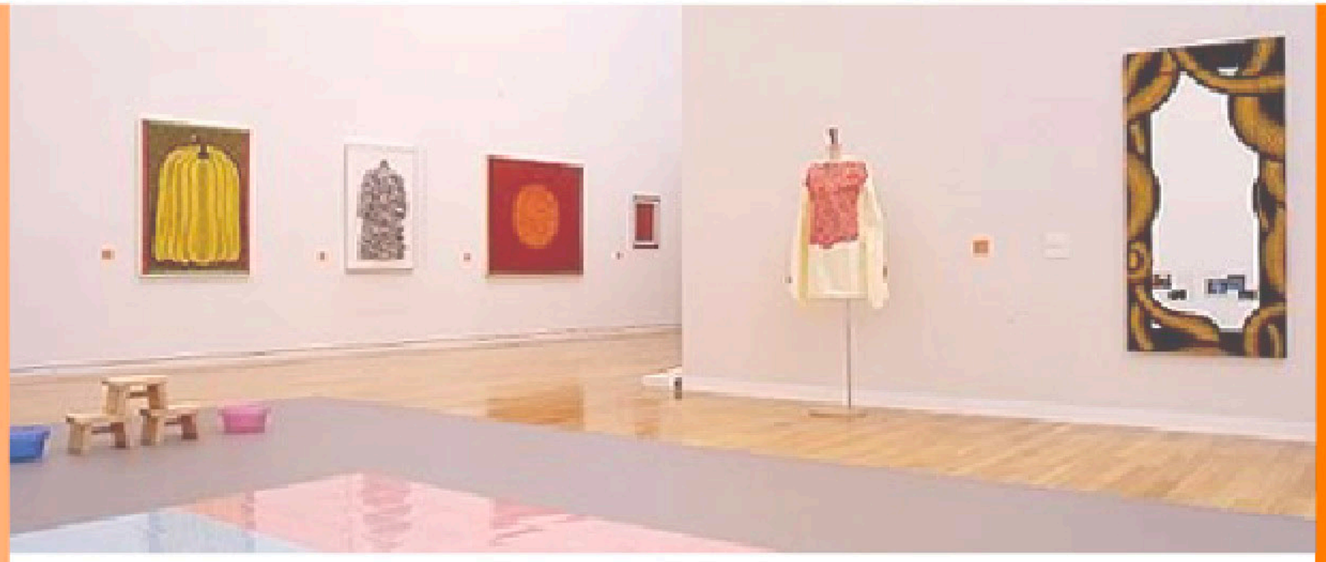
コレクションのテーマは、自分と同世代の作家が、日本や東京をテーマ・素材に、国内の美術館やギャラリーのために制作した作品。自分にとって、作品を買うことは自分が「良い」と言ったことに対する責任のとり方でもある。大好きな作家とはとことん付き合ってゆきたい。例えば日本人作家の回顧展が国内で行われる際に、代表作はすべて海外から借りたもの、といったケースがあるけれど、これは恥ずかしいことだと思うし、国内での評価や支援がなく、重要な作品が、海外に流出するようなことがあってはいけないと思っている。

コレクションの作品すべてが中核と言いたいが、一つだけ挙げるなら草間彌生の一連の作品。1950年代、60年代、70年代、80年代の作品をまとめて持っている。いずれも良い作品（ルビ：ピース）で、散逸させぬようコレクターとして責任を感じている。

テーマのきっかけは、作品というより、作家との運命的な出会い、といった方が正しいかもしれない。一人は草間彌生さん。コレクションを始めた頃、興味を持って購入してい

08 382 collection

collection▶



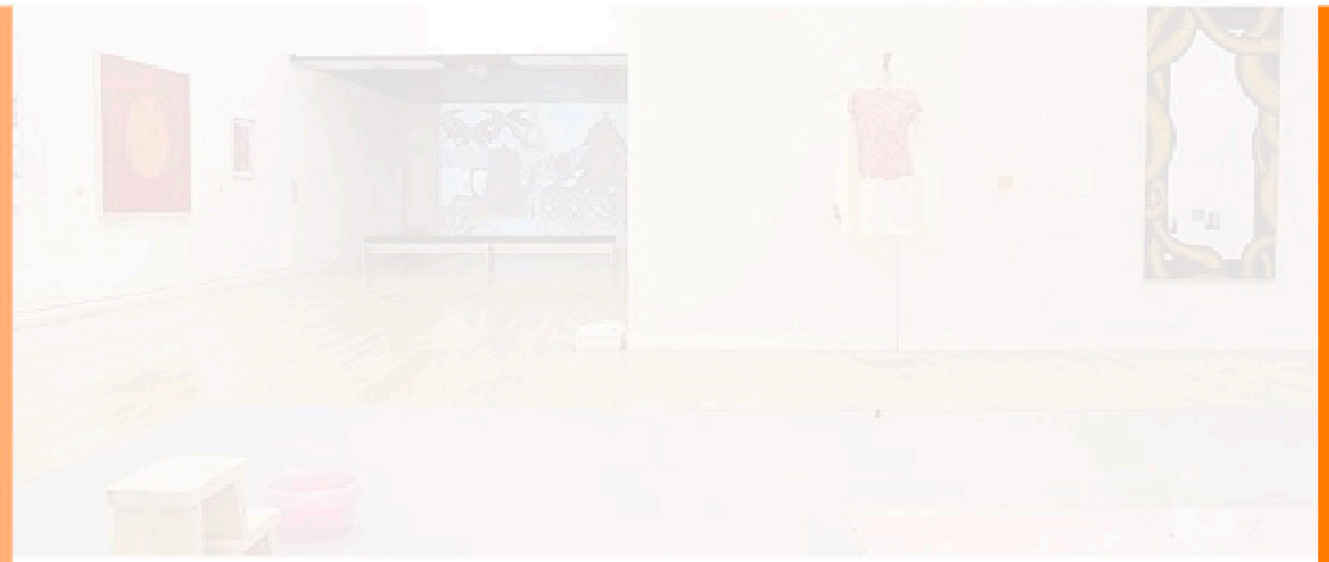
382 collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

テーマのきっかけは、作品というより、作家との運命的な出会い、といった方が正しいかもしれない。一人は草間彌生さん。コレクションを始めた頃、興味を持って購入していた。近年アメリカで開催された大規模な回顧展で、僕は日本人の個人コレクターとして唯一の貸出者となった。それまでアウトサイダー・アートなどと呼ばれていた草間作品が再評価されることになったこの巡回展は、草間さんにとっても僕にとってもエポックメイキングな出来事だった。もう一人は島袋道浩さん。1996年、中原浩大展のオープニング・レセプション会場で中原さんのアシスタントとして来ていた彼と出会った。音楽の話で意気投合した僕たちは、やがて文通するようになり、仲良くなった。最近はヴェネツィア・ビエンナーレに出品するほどの活躍ぶりだが、作家としての彼の成長を通して、自分も色々なことを教えてもらった。そしてドミニク・ゴンザレス＝フォルステル。1995年、ギャラリー小柳がオープンして2回目の展覧会だった。彼女は《フィーユ／ギャルソン》という作品の習作のため、自分で撮った写真や雑誌の切り抜きでアルバムを制作しており、僕はそれを購入した。同時にアルバムをテーマにしたコミッション・ワーク*を思いつき、依頼した――「僕のポートレートをアルバムで作ってくれませんか？」と。島袋さんやドミニクと出会えたのは運が良かった。今でも2人は僕にとって大切な作家であり友人。だから今回ドミニクには自宅の設計を依頼し、島袋さんには庭を作ってもらった。

08 382 collection

collection▶



382 collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

さんやドミニクと出会えたのは運が良かった。今でも2人は僕にとって大切な作家であり友人。だから今回ドミニクには自宅の設計を依頼し、島袋さんには庭を作ってもらった。彼ら2人の存在があって、この家があり、僕の人生がある。この10年間の人生を共に歩んできた、といった感じだ。

現代美術で、一番最初に購入した作品は草間彌生の作品。当時は草間さんの作品が欲しくて、作品を所蔵する美術館に片っぱしから電話をかけ、取扱い画廊を聞いた。大学生の時、草間さんの絵を見てガツンときて以来、草間さんが僕の「アイドル」だったから。

作品を購入する時には、それが良ければ買う。素材、サイズ、展示の都合などは一切考えない。もちろん値段は問題だが。僕にとっての「良い」とは、「美しいな」とか「何と素晴らしいメッセージを発信しているんだろう」などと同義であるかもしれない。視野を広げ、世界を身近にしてくれるなど、琴線に触れる強さがあるものはすべて「良い」作品。ただし支払える額には限度があるので、良いと思ってもあまりに高額なものは、残念ながら対象外。

08 382 collection

collection▸

382 collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

ながら対象外。

今後もこのままコレクションを続けていきたい。特に若くて可能性のあるアーティストの作品は買い続けたい。ただ、若い作家を見るのには「感覚の定年」があるんじゃないかと思う。例えば「ガングロ」が流行った時、僕はかわいいとも綺麗とも素敵とも感じなかった。けれど、あれだけ女の子たちの間で流行っていて、一緒に手をつないで歩いている男の子がいるということは、彼らにとって何か強い魅力があったのだと思う。それを言葉で説明するのは無理でも、感覚を共有できれば良かったが、自分にはどうしてもできなかった。だから、その世代から優れた作家が出てきても、僕は彼らのやることを理解できないかもしれない。おそらくその時が、新しいアーティストと付き合ってゆくことに対する「定年」なのだと思う。

コレクションをすることは、「自分で判断する」ことで「自分自身を信頼する」ということ。アーティストと交流するのは楽しいけれど、同時に自分も試されているので、常に真剣勝負になる。だから自分の考えをきちんと持っていなくてはいけない。アートからは色々なことを教えてもらったので、僕からも恩返しができれば嬉しい。僕のような普通

08 382 collection

collection▶

382 collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

かった。けれど、あれだけ女の子たちの間で流行っていて、一緒に手をつないで歩いている男の子がいるということは、彼らにとって何か強い魅力があったのだと思う。それを言葉で説明するのは無理でも、感覚を共有できれば良かったが、自分にはどうしてもできなかった。だから、その世代から優れた作家が出てきても、僕は彼らのやることを理解できないかもしれない。おそらくその時が、新しいアーティストと付き合ってゆくことに対する「定年」なのだと思う。

コレクションをすることは、「自分で判断する」ことで「自分自身を信頼する」ということ。アーティストと交流するのは楽しいけれど、同時に自分も試されているので、常に真剣勝負になる。だから自分の考えをきちんと持っていなくてはいけない。アートからは色々なことを教えてもらったので、僕からも恩返しができれば嬉しい。僕のような普通の会社員でも、目標をもち、愛をもってやり続ければ形となって、次の世代につながってゆく。たとえば一生を終える頃、どこかの美術館に全てのコレクションを寄贈するかもしれないし、それが自分の役割かなと思う。一人ひとりが、それぞれの立場で、目標と愛を持って、できることをしてゆけば、日本のアート界も、きっと良い方向に向かってゆくだろう。

F.T.colLection 01
S.S.+K.M. collection 02
O.S. collection 03
O.N. collection 04
T.R. collection 05
M.H. collection 06
Ugeyan collection 07
382 collection 08
S.H. collection 09

photo Keizo Kioku

アンソリットな情熱の宇宙 ▶▶

TOC collection 10

アートがあれば　WHY NOT LIVE FOR ART?

other collections

09 SH collection

gallery view ▶

バリー・マギー《 Untitled 》2000
photo 木奥恵三

バリー・マギー《 Untitled 》2000
photo 木奥恵三

自分の美意識を養うため、そして好きなものに囲まれてアーティストの持つエネルギーをもらいたいから、という理由で収集されているコレクション。『ヴォーグ』誌のファッション・ポートレートで有名なアーヴィング・ペン（1917- / アメリカ）や、ファッション・フォトグラファーかつアーティストとして、アンディ・ウォーホールと同時代を共に過ごしたピーター・ベアード（1938- / アメリカ）の、今では貴重な写真から、名画の人物や女優に扮したポートレートで知られる森村泰昌（1951- ）、村上隆（1962- ）のごくごく初期の作品、さらには無名の若手作家からポスターからフィギュア、子供の絵、洋服、音楽と、全てがエネルギーをくれる同じ価値を持つものとして、所狭しとディスプレイされている。
ストリートのグラフィティで注目されたバリー・マギー（1966- / アメリカ）の展示

ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY

| Home | Introduction | artists | Information |

バリー・マギー《 Untitled 》2000
photo 木奥恵三

バリー・マギー《 Untitled 》2000
photo 木奥恵三

や、ファッション・フォトグラファーかつアーティストとして、アンディ・ウォーホールと同時代を共に過ごしたピーター・ベアード（1938- / アメリカ）の、今では貴重な写真から、名画の人物や女優に扮したポートレートで知られる森村泰昌（1951- ）、村上隆（1962- ）のごくごく初期の作品、さらには無名の若手作家からポスターからフィギュア、子供の絵、洋服、音楽と、全てがエネルギーをくれる同じ価値を持つものとして、所狭しとディスプレイされている。
ストリートのグラフィティで注目されたバリー・マギー（1966- / アメリカ）の展示方法が大好きだというコレクターは、いろいろなものが、過剰かつエレガントに混ざり合った装飾様式を意味する「アンソリット」という言葉に出会い、独特の世界を築き上げている。本展では、その世界の一部を本人の手によって再現。

S.H. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

アンソリットな情熱の宇宙

もう10年以上前のこと。あるとき雑誌を読んで「アンソリット」という言葉に出合い、僕の好きな世界観はこれだな、と気付いた。日本人は、たとえばシャガールを集めていたら、シャガールだけの世界で飾るでしょう。僕のコレクションには、現代アートもあれば、オリジナル・プリントもあるし、マクドナルドのおまけもあれば、フィギュアもある。拾ってきた石ころもあれば、貝殻もあるし、「何でこんなものとこんなものが並ぶの？」っていうのがアンソリットであると思う。その記事はフランスの知的階級の間で流行している、といったようなものだったが、考えてみれば、澁澤龍彦の部屋もアンディ・ウォーホルのコレクションもアンソリットだし、自分では気付かぬうちにそういうものに感化されていたのだと思う。仕事で外国のクリエイターの部屋を訪ね、「何でこんな飾り方ができるのかなあ」というのをいつも見てきたが、今思えば、それもアンソリットだった。存在しえないものがそこに共存する、という、日本人の美意識にはない感覚なのだ。普通、現代アートの前にマクドナルドのおまけは置かないでしょう。自宅にはバスキアの絵の横に子供の絵が掛かってますからね。子供の絵って、すごい。中でも良い絵があると子供と休みの日に額縁を作ったり、リキテンスタインと同じレベルの額縁に入れ

S.H. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

あると子供と休みの日に額縁を作ったり、リキテンスタインと同じレベルの額縁に入れて、隣りに掛けてあげる。有名無名とか、高い安い、僕には全然関係なくて、すべてに同じ価値がある。お金があるからできるんでしょう、ということではない。若い人たちにも言っているが、お金がなくても、ワンルームのアパートに住んでいても、気に入ったポスターがあれば飾り方ひとつで楽しめる。そうやって、気持ちを豊かにしていく。将来はそこを目指してゆけば良いんじゃないか。僕はつつましく暮らす外国の老夫婦が豊かな部屋作りをしているのを見てきて、お金じゃなく、気持ちなんだ、ということを学んだ。どんな金持ちがシャガールを飾ろうがセザンヌを飾っていようが、エネルギーは負けてない。一つひとつ情熱を込めて探し、情熱を込めて飾っているわけだから。だからテーマの中核となる作品はない。全部でひとつになっている。

もともとアートに興味はあったが、若い頃はどこに行けば良いかわからなかったし、どういうものがあるかもわからなかった。25歳の頃に仕事をしていた事務所には、時代を捕らえる感覚が早い人たちが出入りしていて、彼らの仕事場や家に行くと、面白いものがいっぱいあった。僕は1点1点、もう、興味津々だった。そんな中で金子國義さんの絵が欲しくなった。その頃からもう、金子さんのコレクターは大勢いたから、僕は油彩を買えな

09 SH collection

collection▶

S.H. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

くなった。その頃からもう、金子さんのコレクターは大勢いたから、僕は油彩を買えなくて、デッサンを2万円月賦で買わせていただいた。とにかく本物を持ってみたいなあ、と。そのあと金子さんのコラージュを、また月賦で買わせていただいて、コレクションはそこから始まった。大した部屋に住んでいたわけではないし、金もあったわけではないが、集めるたびに充実感があった。それで、お金を稼ぐに従って、増やしていったわけだ。今年で50歳だから、25年こんなことをしている。僕はコマーシャルを仕事にしている人間だから、時代を先取りして行かなくちゃいけない。アートを自分の眼で見極めるということで、自分の美意識を養ってきたように思う。森村泰昌も、本当に初期から買っている。ピーター・ビアード、バリー・マギー、マーク・ライデンもそうだ。35歳の頃、自分なりの予算で本当にいいものが持てると思い、写真を蒐集し始めた。それでアーヴィング・ペンに夢中になったり、ハーブ・リッツ、メイプルソープなどの著名人や、そうでない人も含め、とにかく写真のコレクションに相当つぎ込んだ。だから僕が今でも集めているのは、写真と、現代アートの若い作家。自分のできる範囲でやっぱりいいものを追求したい。僕のポリシーというのは有名、無名じゃない。好きなもの。ピッときたものにだけ反応するわけだ。好きなものに囲まれて、そのエネルギーを貰いたい。どんな無名な人の作品でも、みんなエネルギーが入ってるから、僕にエネルギーをくれる。作品を集める

09 SH collection

collection▶

S.H. collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

分なりの予算で本当にいいものが持てると思い、写真を蒐集し始めた。それでアーヴィング・ペンに夢中になったり、ハーブ・リッツ、メイプルソープなどの著名人や、そうでない人も含め、とにかく写真のコレクションに相当つぎ込んだ。だから僕が今でも集めているのは、写真と、現代アートの若い作家。自分のできる範囲でやっぱりいいものを追求したい。僕のポリシーというのは有名、無名じゃない。好きなもの。ピッときたものにだけ反応するわけだ。好きなものに囲まれて、そのエネルギーを貰いたい。どんな無名な人の作品でも、みんなエネルギーが入ってるから、僕にエネルギーをくれる。作品を集める最終的な理由は、そこにある。

現在のアートシーンに対して思うのは、日本の社会のしくみが、若い人たちにアートを発表する場をもっと作ってあげたらいいんじゃないかということだ。アートに対して応援をしてあげないと、若い人たちは食べていけないから。たとえばイタリアだと、建物を建てたらアートを何点か購入しないといけないというシステムがあって、そこで絵や彫刻は売れていく。僕はそんなに余裕があるわけじゃないが、応援してあげたい。そのためなら、古いコレクションを売って、若い作家の作品を買うのにあてたりしようかと考える。とにかく国全体がサポートすることを考えていかないと、文化は育ってゆかないと思う。

F.T.colLection 01

S.S.+K.M. collection 02

O.S. collection 03

O.N. collection 04

T.R. collection 05

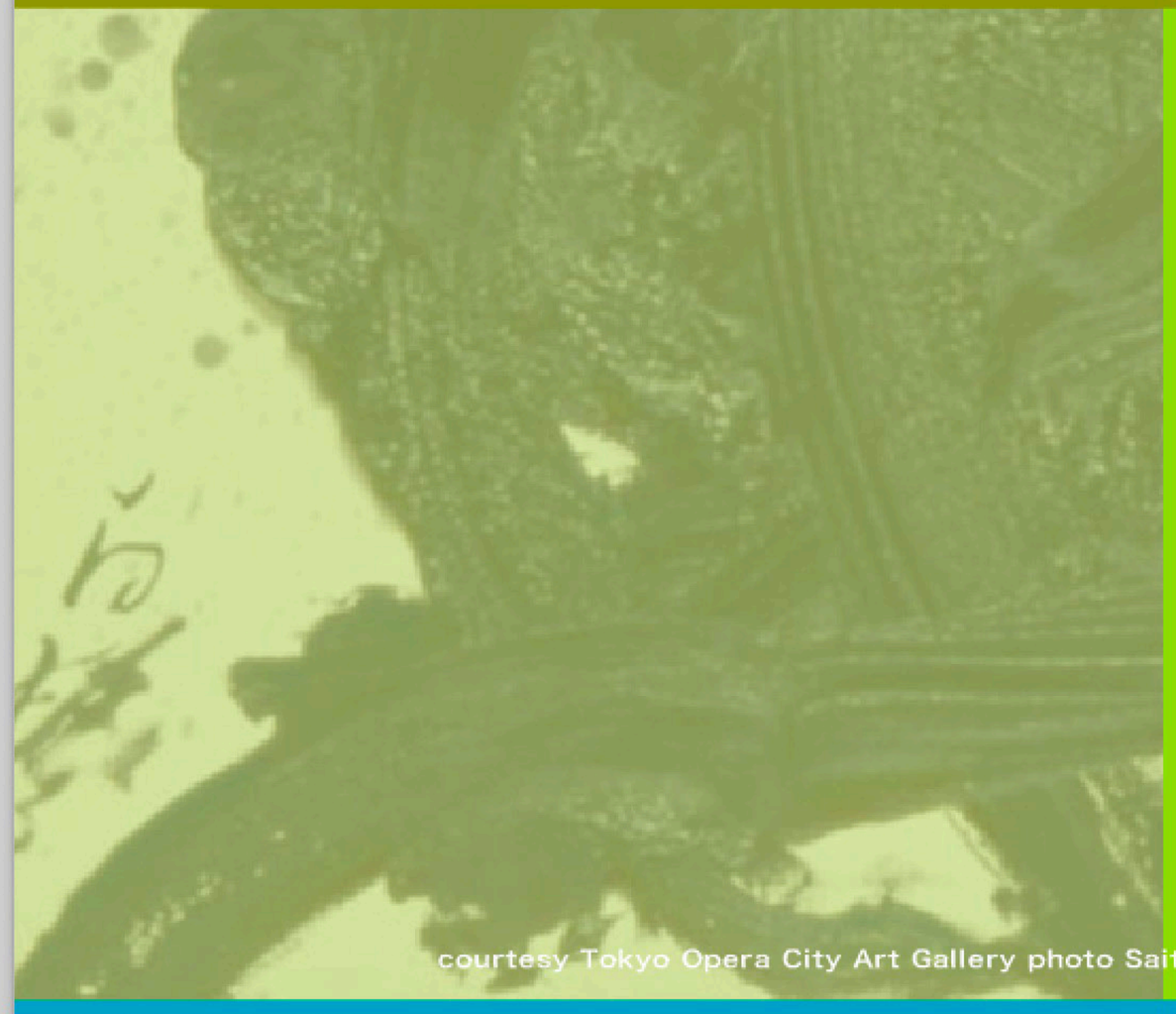
M.H. collection 06

Ugeyan collection 07

382 collection 08

S.H. collection 09

▼ TOC collection 10



courtesy Tokyo Opera City Art Gallery photo Saito Arata

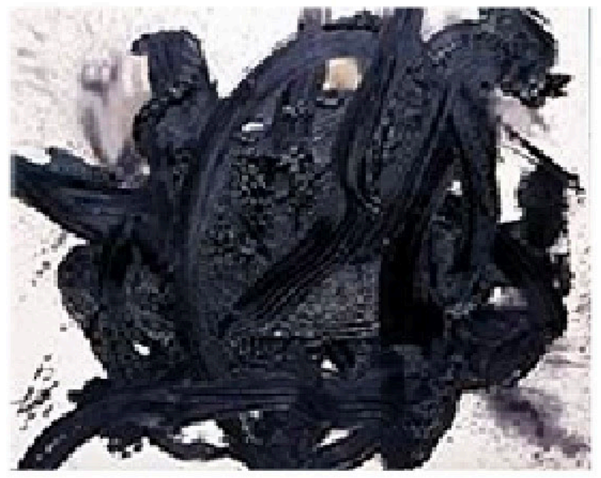
東洋的抽象と「白と黒」の世界 ▶▶

ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY

10 TOC collection

gallery view ▶

郭仁植《 work 》1985（参考作品）
photo 斉藤新



（写真右上）難波田龍起《群像 A 》1980
photo 斉藤新

（写真右下）白髪一雄《 游墨、壱 》1985
photo 斉藤新

東京オペラシティアートギャラリーのコレクションから、その2大テーマ「東洋的抽象」と「ブラック・アンド・ホワイト」を象徴する作品をセレクション。
当館のコレクションは、地権者で共同事業者の寺田小太郎氏が、東京オペラシティの文化事業に賛同して収集した、およそ2500点におよぶ作品の寄贈によって形成された経緯をもつ。日本を代表する抽象画家、難波田龍起とその息子・史男の作品をはじめ、戦後日本で活躍している日本と韓国の作家を中心に、2大テーマを紹介しながら、「プライベート・コレクション」が「パブリック・コレクション」になった姿も浮かび上がる。

TOC collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

コレクションについて思うこと――東洋的抽象と「白と黒」の世界

このコレクションは、あくまで私個人の目と頭でつくったものであるから、偏りの多い癖のあるものだと思う。しかしある面ではそれがおもしろいのではないかとも思う。戦争・空襲を体験した私には、価値として何が残るかという意識がつねにあり、不況と言われながらも、今の飽食の時代に人々は豊かな生活を重ね、その果てに何で満足するのか、自分の生きた証として何を残すのか。私は最終的には芸術しかないと感ずる。おそらく今はそれほど美術や音楽に関心のない人でも、ある状況を与えられて、自分とは何か、自分の証を残すということは何かを追求していくと、結局、芸術の世界にたどり着くのではないだろうか。

コレクションを始めたのは20年ほど前、きっかけは難波田龍起先生の作品に出会ったことだ。1988年に難波田先生の0号程度の作品を3点求めたのが最初で、その翌年「石窟の時間」50点を入手した。難波田先生の作品を評するときに、「精神的である」「精神性が高い」と言われるが、私の中では、この精神性というものの解釈がいつでも問題になっている。敗戦後、現象と言う現象を否定し続け、その根元を横索する考えが、頭から始終

TOC collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

ている。敗戦後、現象と言う現象を否定し続け、その根元を横索する考えが、頭から始終離れなかった。

1997年に難波田先生が亡くなってから振り返って考えると、たとえば私が難波田先生を存じ上げる以前に、その作品を単独で見せられてもそれほど直接的に感動しなかったと思う。試行錯誤しながらさまざまな仕事を積み重ねてこられて、最晩年の一連の作品に至って、過去のすべての作品が一気に生命を得たというような感じがする。先生がどのように自覚なされていたのかはわからないが、思考するということを最後までやめなかった方であると思う。

難波田先生の絵に触れるまで、私は抽象作品をあまり積極的に見ようとはしていなかったが、先生の作品から「日本的抽象」「東洋的抽象」という概念に導かれ、それが拡大してコレクションのコンセプトになった。これは、さらには自分の好きな「白と黒」の世界ともダブるところがあるのではないだろうか。昔は映画しか娯楽がなく、それもモノクロが主流だった。カラーに変わったときに、それを少しも美しいと思えず、反射的にモノクロの世界が美しく見えてきたのだ。表現手段が豊かになれば、即表現が豊かになるとは思

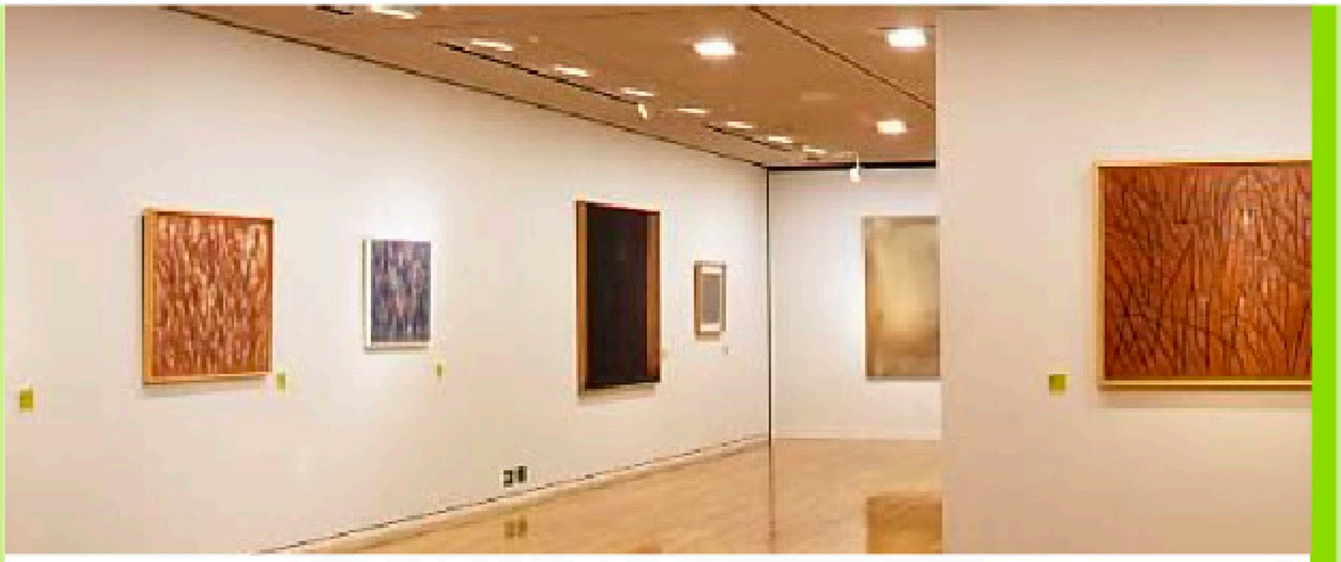
TOC collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

ロの世界が美しく見えてきたのだ。表現手段が豊かになれば、即表現が豊かになるとは思えない。表現を究極的に押し進めていくと非表現にたどり着いてしまうという考えが私にはあって、その非表現の一歩手前で留まった作品や、表現の世界から非表現の世界を振り返ったような作品、またその逆の作品というのに非常に惹かれる。表現と非表現が照応しあっている、その動きにである。

韓国の作家にも大変興味がある。同じ抽象でも難波田龍起と李禹煥は、少し違うように思う。朝鮮半島の影響は日本美術の一つの大きな要素で、歴史的に見ても現在においても生きている。韓国の作家の仕事は、日本文化を理解するうえで大変重要ではないかと思っている。今日、日本的と思われている要素の多くの部分が、朝鮮半島の影響で形成されたものではないだろうか。朝鮮半島の影響を度外視してしまったら、日本の文化史というのは成立しないだろう。

李さんがあからさまに、たとえば「無」というような言葉を意識されていたかどうか。現代作家が現代の美術思潮にかかわらず創作を続けるとは考えられないが、李さんほど歴史性を超越して直截に東洋を感じさせる作家を知らない。類型として普遍的に成立しそうで



TOC collection gallery view　photo:Kioku Keizo

Interview

ている。今日、日本的と思われている要素の多くの部分が、朝鮮半島の影響で形成されたものではないだろうか。朝鮮半島の影響を度外視してしまったら、日本の文化史というのは成立しないだろう。

李さんがあからさまに、たとえば「無」というような言葉を意識されていたかどうか。現代作家が現代の美術思潮にかかわらず創作を続けるとは考えられないが、李さんほど歴史性を超越して直截に東洋を感じさせる作家を知らない。類型として普遍的に成立しそうでありながら、李さんの存在は極めて孤高である。対比的にいえば、難波田先生はギリシャへの憧憬から出発して、美術思潮の誠実な試みを積み重ねた上に、最晩年に至って他者にまみれない個性の確認に到達したと思われ、その地平の彼方に李さんの志向性と交わる一点があったに違いない。

個人の存在は、それ自体それぞれ他者の思索の契機であり続ける。人格も一作品もその集合体も等価である。一私人が何ものかに導かれて形成したコレクションが如何なる時、如何なる人、如何なる形でか、かもし出すひそやかな共鳴音を聴くことができるなら、意味のあることなのであろうか。